

## 高松市内遺跡発掘調査概報

－平成24年度国庫補助事業－

2013年3月

高松市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、高松市教育委員会が平成 24 年度に国庫補助事業として実施した高松市内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
- 2 本書には平成 24 年に実施した事業のうち、高松市内遺跡発掘調査事業として平成 24 年 1 月から 12 月にかけて実施した試掘調査および内容確認調査を 19 件、平成 23 年度史跡天然記念物屋島基礎調査事業（屋島城跡）の内容確認調査について収録した。なお、平成 23 年に実施した事業のうち、未報告であった事業についても本書に掲載している。
- 3 調査は、高松市教育委員会 教育局 文化財課 文化財専門員 小川賢・渡邊誠・高上拓・波多野篤・松篠紀子、同課非常勤嘱託職員 中西克也・上原ふみが担当した。
- 4 本書の執筆は小川、渡邊、高上、波多野、松篠、中西、上原が行い、編集は同課埋蔵文化財担当職員 池見渉が行った。
- 5 調査の実施にあたっては、次の機関および方々の御指導・御協力を得た。(敬称略、順不同)  
文化庁、四国森林管理局、香川県教育委員会、大久保徹也・浅海瑛里香、渡邊友佳・片山達也・木村達馬・橋大河・合田周平・西森春花・美馬広河・明見拓也・八塚祐樹・山本修平・山本麻衣江（以上徳島文理大学）、向井敏伸・吉本正文
- 6 本書の挿図として、高松市都市計画図 1/2,500 および国土地理院地形図 1/50,000 を一部改変して使用した。前者は縮尺を 1/5,000 に改変し、使用している（各調査地位置図）。ただし、調査地位置図に関しては一部調査範囲の都合上 1/5,000 以下の縮尺を使用しているものがある（各図に別途記載している）。
- 7 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 8 本報告書の高度値は海拔高を表し、G.N が座標北、M.N が磁北を表す。

## 目 次

第1章 高松市内遺跡発掘調査事業（平成23年分（補）、平成24年1月～12月）	
高松市内遺跡発掘調査事業および史跡天然記念物屋島基礎調査事業位置図	3
押部庵寺（1）（宅地造成）	4
奥の池遺跡（取水施設築造）	4
押部庵寺（2）（宅地造成）	5
松林遺跡（集合住宅建設）	7
特別史跡讃岐国分寺跡－第42次調査－（宅地造成）	9
石清尾山古墳群縄荷山地区分布調査（重要遺跡確認調査）	14
船岡山古墳－第8次・9次調査－（重要遺跡確認調査）	17
高松城跡（丸の内地区）（道路整備）	22
庵治町竜王山地区（公園造成）	22
城塁遺跡（共同住宅建設）	23
横内東遺跡（土地造成）	25
史跡讃岐国分尼寺跡－第12次調査－（内容確認調査）	27
通り谷遺跡（墓園区画造成）	36
条里跡（香南町横井）（宅地造成）	36
川部町馬堂地区（放課後児童クラブ新築）	37
林木高遺跡（小学校校舎増築）	37
上之町二丁目地区（市営住宅建替）	38
多肥上町宮尻地区（薬局建設）	38
高松城跡（西の丸町地区）（交通広場整備）	39
空港跡地遺跡（上青木地区）（事務所建設）	42
条里跡（香南町由佐）（事務所建設）	43
第2章 平成23年度 史跡天然記念物屋島基礎調査事業	
屋嶋城跡（浦生地区）（内容確認調査）	44



- 1 拝師廬寺(1)
- 2 奥の池遺跡
- 3 拝師廬寺(2)
- 4 松林遺跡
- 5 特別史跡讃岐国分寺跡-第42次調査-
- 6 石清尾山古墳群稻荷山地区分布調査
- 7 船岡山古墳-第8次・9次調査-
- 8 高松城跡(丸の内地区)
- 9 鞍治町竜王山地区
- 10 城塁遺跡
- 11 横内東遺跡
- 12 史跡讃岐国分尼寺跡-第12次調査-
- 13 通り谷遺跡
- 14 条里跡(香南町横井)
- 15 川部町馬堂地区
- 16 林宗高遺跡
- 17 上之町二丁目地区
- 18 多肥上町宮尻地区
- 19 高松城跡(西の丸町地区)
- 20 空港跡地遺跡(上青木地区)
- 21 条里跡(香南町由佐)
- 22 屋嶋城跡浦生地区

第1図 高松市内遺跡発掘調査事業および史跡天然記念物屋島基礎調査事業位置図

## 第1章 高松市内遺跡発掘調査事業（平成23年分（補）、平成24年1月～12月分）

### 拝師庵寺 (1)

- 1 所在地 高松市上林町
- 2 調査期間 平成23年11月30日
- 3 調査担当者 小川 賢・上原 ふみ
- 4 調査の原因 分譲住宅建設用地造成工事
- 5 調査の概要

#### (1)はじめに

上林町字本村で計画された分譲住宅建設用地造成工事予定地は、一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である拝師庵寺に位置する。よって、事業者の任意の協力により工事に先行して試掘調査を実施することとなった。調査では、事業予定地範囲内に計3本の南北方向のトレンチを設定した。

#### (2)調査成果

調査の結果、北端の第1トレンチにおいては、表土下約2.1mの深度まで掘削をし、地山を確認した。第2・3トレンチにおいては、表土下約0.6mまでの深度では花崗土が全域にわたって敷設されていた。各トレンチにおいて、花崗土



第2図 調査地位置図

の下層には、砂礫層、疊層、搅乱層などの過去の造成土を検出した。今回の調査は、基盤層の検出深度が極めて深かったため、包蔵状況の一部の確認にとどまり、対象地全域の埋蔵文化財の有無および包蔵状況を把握することはできなかった。

#### 6まとめ

上記のとおり、試掘調査を行った範囲は周知の埋蔵文化財包蔵地およびその隣接地であるが、今回確認した深度では埋蔵文化財に影響を与えるものではなく、工事を行う際には保護措置が不要と考えられる。（上原）

### 奥の池遺跡

- 1 所在地 高松市西春日町
- 2 調査期間 平成24年1月23日～24日
- 3 調査担当者 船築 紀子
- 4 調査の原因 奥の池取水施設築造工事
- 5 調査の概要

#### (3)はじめに

西春日町で計画された取水施設建設予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である奥の池遺跡の範囲内である。よって工事に先行して試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、施設本体部分の約400m<sup>2</sup>を対象とし、その範囲内に合計3本のトレンチを設定した。

#### (4)調査成果

すべてのトレンチで、約1.5～2.0m超の厚い近世以降の堆積土で覆われていた。遺物は、弥生土器片が1点出土した。

後日実施した立会調査の結果、近世以降の堆積土を約2.6m掘削したのち、地山面を確認したが、遺構は確認できなかった。

#### 6まとめ

対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地であるため、試掘調査等を実施したが、遺構は確認されなかった。なお、今回の対象範囲について必要な保護措置はすでに完了している。（船築）



第3図 調査地位置図

## はやしはいじ 拝師廃寺 (2)

- 1 所在地 高松市上林町
- 2 調査期間 平成23年12月21日・27日
- 3 調査担当者 小川 賢・中西克也・上原ふみ
- 4 調査の原因 分譲住宅建設用地造成工事
- 5 調査の概要

### (1)はじめに

調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「拝師廃寺」に該当し、工事に先行して試掘調査を実施することになった。試掘調査では、工事対象範囲の中央に南北方向の2本のトレンチを設定した。

### (2)調査成果

#### a 基本層序

調査地は2筆の水田に分かれており、南側の水田面がやや低い。層序は、1～11層に分層できる。1層は搅乱、2層は現水田(層厚20cm)、3・4層は灰白色シルト質板細砂(層厚10～30cm)であり、中世～近世の水田層で、少なくとも2面の水田面に細分できる。5層は暗褐色シルト質板細砂で北端部のみに堆積する。6～8層は遺構の埋土である。9層は黄灰色細砂で10層の漸移層である。10・11層は地山であり、遺構の確認面である。地山は中央部と南端部が砂礫層(11層)であるが、北側と南側は黄褐色粘質土(10層)である。なお、11層は10層の下に堆積するものであり、中央部と南端部では11層が盛り上がったと考えられる。

#### b 遺構の概要

各トレンチにおいて複数の遺構を確認した。内訳は竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、溝3条、ピット12基である。1トレンチでは北端部において竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、溝1条、ピット1基を検出した。竪穴住居跡は方形を呈し、床面までの深さは30cmである。奈良時代の土器が出土した。掘立柱建物跡は1間×1間以上あり、時期は不明である。溝は東側に延びており、幅は2.10m、深さ25cmを測り、須恵器壺が出土した。2トレンチでは中央部で溝2条、ピット9基、南端部で竪穴住居跡2棟、ピット2基を検出した。竪穴住居跡は方形を呈し、奈良時代の土器が出土したが、重複しており若干の時期差があると考えられる。2条の溝は方向と規模が異なるが同じ埋土であり、近世のものと考えられる。包含層から弥生時代後期の土器も出土した。

#### 6まとめ

以上のように、試掘調査を行った範囲全域で遺構・遺物が認められた。よって工事を行う際には保護措置が必要であると考えられる。(中西)



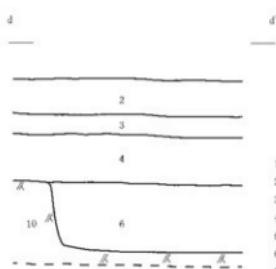
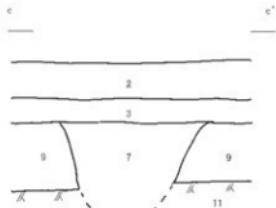
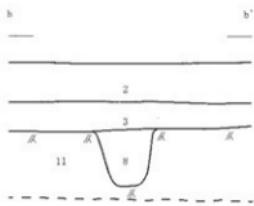
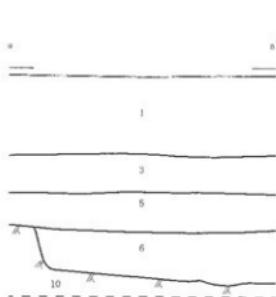
第4図 調査地位置図



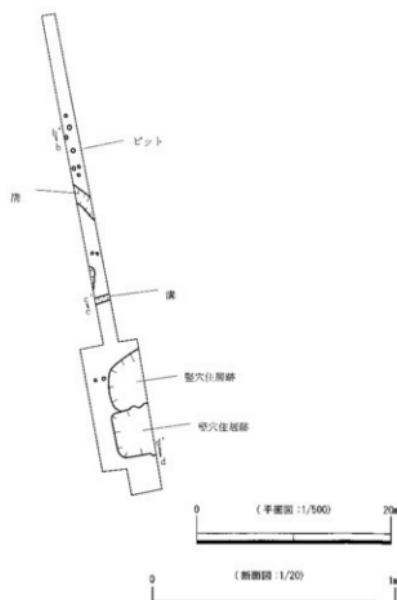
第5図 1トレンチ竪穴住居跡検出状況（北東から）



第6図 1トレンチ検出状況（北から）



1. 植乱
  2. 沼水田
  3. 灰白色シルト質粘細砂（近世水田）
  4. 灰白色シルト質粘細砂
  5. 雷丸住居跡
  6. 灰黃褐色シルト質粘細砂
  7. 黑褐色シルト質粘細砂
  8. 灰色シルト質粘細砂
  9. 黄灰色シルト
  10. 黄褐色シルト
  11. 草藪
- } 遺構堆土



第7図 遺構平面図および断面図 (S=1/500・1/20)

まつばやし い せき  
松林遺跡

- 1 所在地 高松市多肥上町
- 2 調査期間 平成24年1月6日
- 3 調査担当者 高上 拓
- 4 調査の原因 集合住宅建設工事
- 5 調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「松林遺跡」に近接する。事業者の任意協力を得て試掘調査を実施した。試掘調査にあたっては南北方向に1本、東西方向に1本のトレーニングを設定した。

南北トレーニングでは、現地表面下約0.8mの深度で遺構面を検出した。遺構面は北側に向かって下降する傾向にある。検出した遺構は土坑1基、溝1条である。遺構面は灰色と黄褐色が斑状に混じるシルト層である。遺構中から遺物は発見できず、詳細な時期は不明である。ただし、溝は位置関係から後述する東西トレーニングで検出した溝(SD1)と連結するものと考えられるため、弥生時代に属する遺構の可能性が考えられる。

東西トレーニングでは、現地表面下約0.8~1mの深度で遺構面を検出した。遺構面は東側に向かって顕著に下降する傾向にある。検出した遺構は土坑1基、溝2条である。遺構面は南北トレーニングと共に通する。南西→北東方向に向かって流れる溝SD1からは、弥生土器と考えられる土器の体部片が出土している。

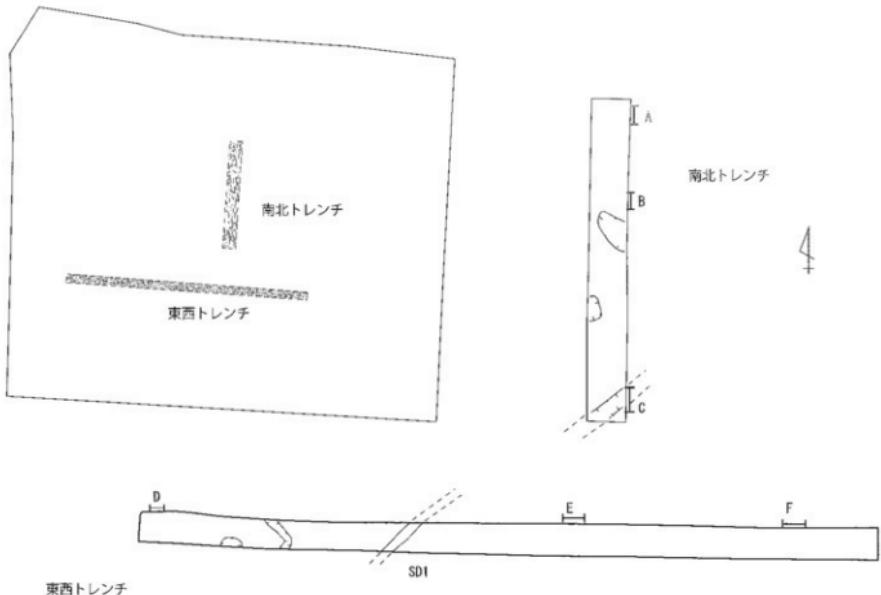
以上の調査から、調査対象地の北半と南西側で埋蔵文化財の包蔵状況が確認できた。一方、南東側については自然地形が下降しており、遺構・遺物はともに確認できなかった。調査後はトレーニングを埋め戻して完了している。

## 6 まとめ

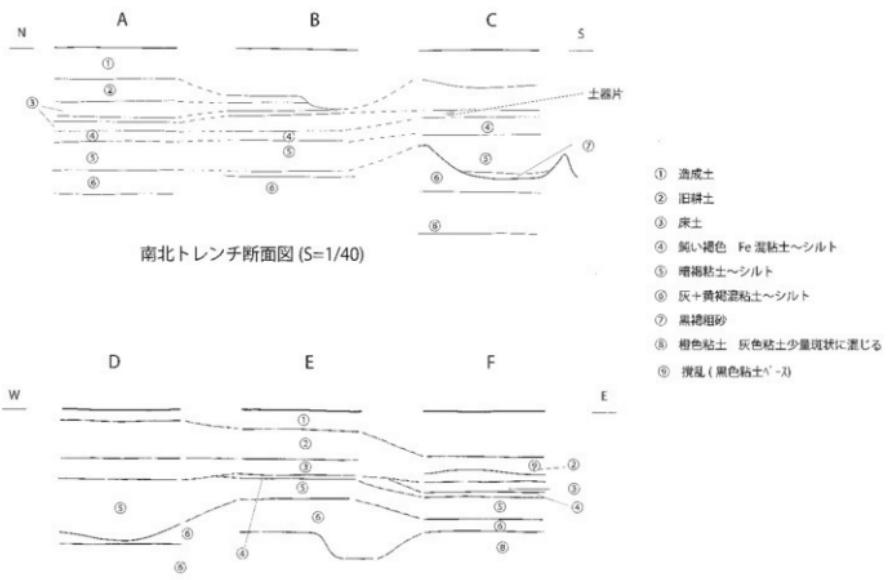
対象地の北半および南西側が、周知の埋蔵文化財包蔵地として認められる。遺跡名は近接する松林遺跡と同じ小字に所在することから、松林遺跡とした。今後の開発行為にあたっては適切な保護措置が必要である。(高上)



第8図 調査地位置図



試掘トレンチ配置図 ( $S=1/200$ )



第9図 トレンチ平面図および断面図 ( $S=1/200, 1/40$ )

## 特別史跡讃岐国分寺跡（第42次調査）

- 1 所在地 高松市國分寺町国分
- 2 調査期間 平成24年1月26日～30日
- 3 調査担当者 渡邊 誠・上原 ふみ
- 4 調査の原因 宅地造成工事
- 5 調査の概要

### (1) 調査の目的と方法

土地所有者が計画している宅地造成等について、事前に確認調査を実施した。遺構面の有無および深さを確認するとともに、遺構の時期および性格を把握し、設置方法の検討のための資料を得るものであった。また、調査地西側の隣接地で実施した35次調査で大型掘立柱建物跡が確認されており、周辺に同様な建物跡が展開する可能性もあるため、事前に遺構の広がりについて確認する必要があった。

### (2) 調査成果

#### ア 基本層序

対象地は全面に渡って造成が行われており、土層の状況から造成土の厚みは第1トレンチで45cm、第2トレンチの東側で45cm、西側で90cmである。造成土の下は旧耕作土があり、西側はその直下が遺構面である。東側はさらに下位に床土、灰色砂質シルト（4層）、4層に地山ブロックを含む層（5層）が存在し、その直下が地山である。遺構面は東西方向はほぼ同レベルで、21次調査から判断すると、第1トレンチから南に向けて傾斜しているものと考えられる。また、第2トレンチの南壁では21次調査のトレンチを確認し、残されていた記録と位置が異なることも判明した。

#### イ 遺構／遺物

調査は重機にて表土を掘削後、人力によって遺構面の精査を行い、埋土等の特徴に応じて、選別した遺構を一段下げ、半截等を行った。

確認した遺構は溝跡、柱穴がほとんどで、遺構の埋土は灰白色系粘質土、褐色粘質土、灰色系粘質土（SP9・17）、白色系粘質土（褐色粘質土を埋土とする遺構を切る）の4種類に区分できた。遺構の約9割が褐色粘質土を基調とした埋土で、年代は出土遺物から中世（鎌倉時代以降）と判断した。この中世の遺構は両トレンチのみならず、35次調査等でも確認されており、対象地全体に広がっているものと考えられる。

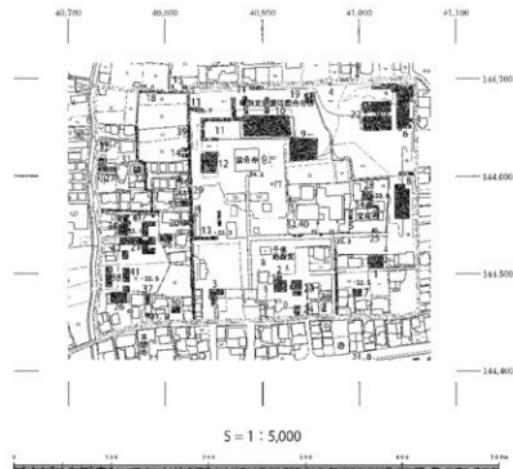
また、地割等に沿わない北西から南東へと南流する幅約1mの溝も確認した。溝からはSKM04等の古代瓦も出土したが、中世の土師質土器が出土しており、中世に埋没したと考えられる。

## 6まとめ

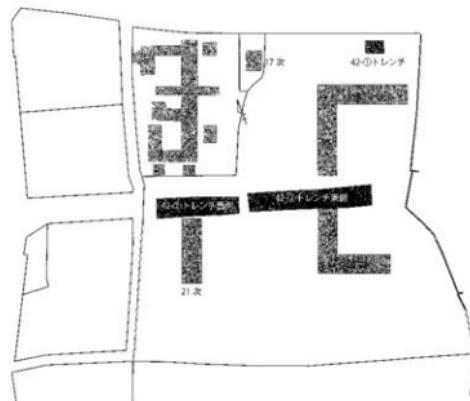
35次調査で確認した掘立柱建物跡は当調査区には伸びないことが判明し、南北7間の建物であることが確定した。以上の調査成果から当該トレンチでは古代讃岐国分寺跡に関連する重要遺構は確認されず、対象地は中世以降の建物等に伴う柱穴跡が多数確認でき、中世における土地利用を確認した。（渡邊）



第10図 調査地位置図



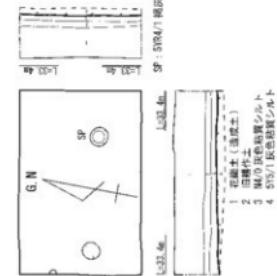
特別史跡讃岐国分寺跡におけるこれまでの調査位置図



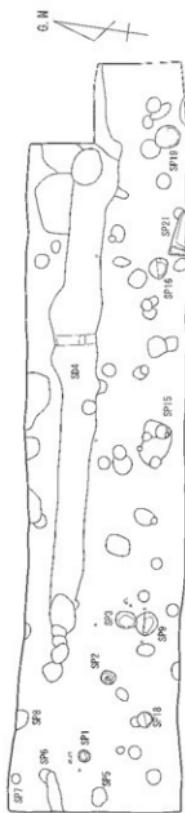
トレンチ配置および既往調査地位置図 ( $S = 1 / 750$ )

第 11 図 特別史跡讃岐国分寺跡における既往調査地位置図およびトレンチ配置図

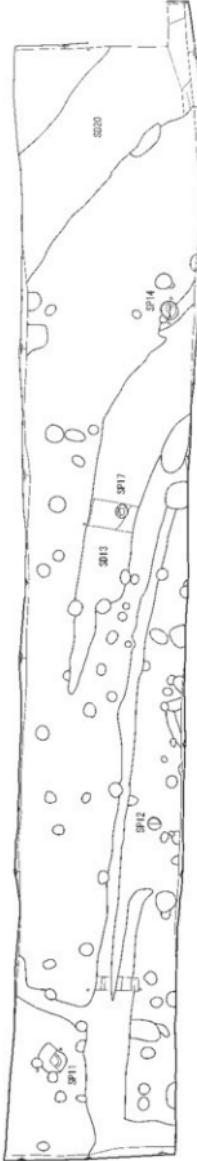
第1トレンチ



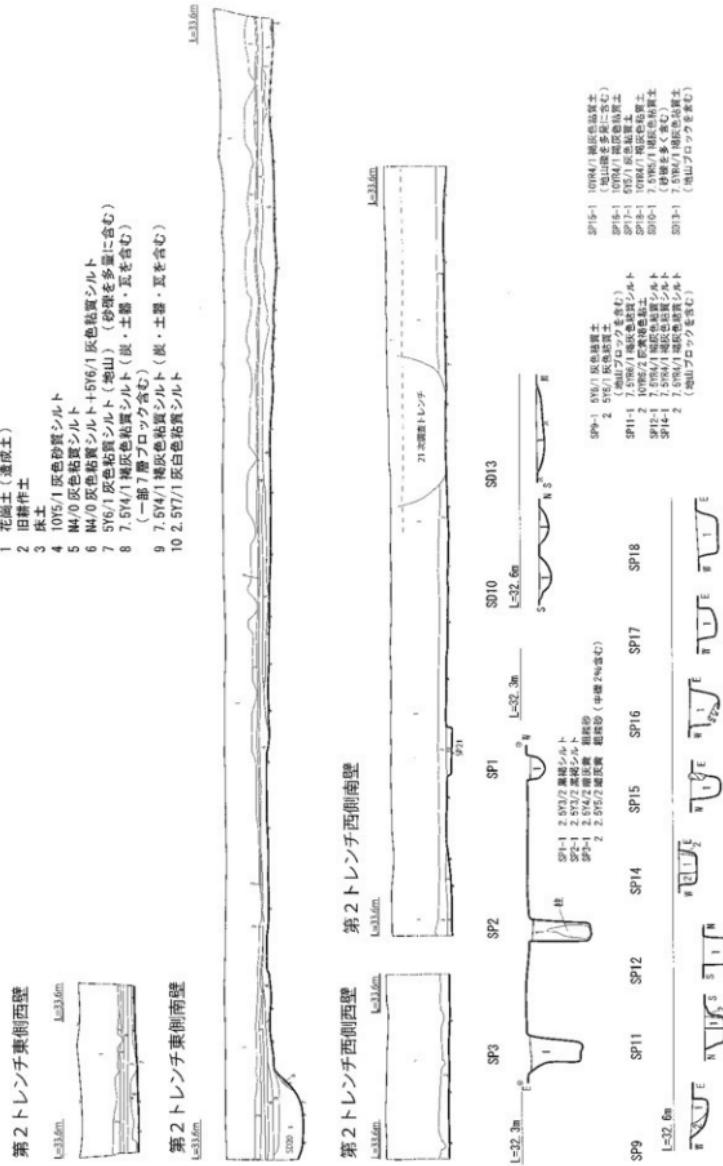
第2トレンチ西側



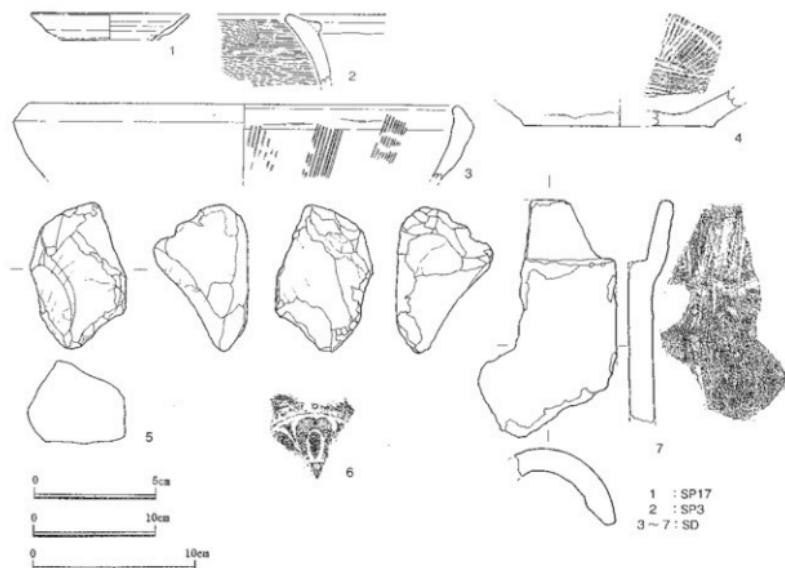
第2トレンチ東側



第12図 トレンチ平面図および第1トレンチ土層図 (S=1/80)



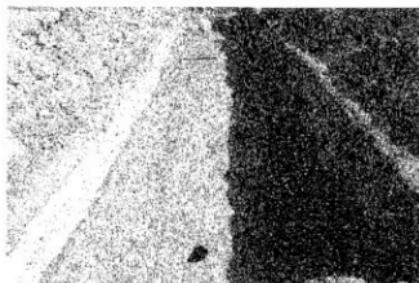
第13図 第2トレンチ土層図および柱穴土層図 (S=1/80)



第14図 出土遺物 (S=1/2, 1/3, 1/4)



第15図 满状造構



第16図 柱穴群

# いわせおやまこふんぐんいなりやまちくぶんぶちょうさ 石清尾山古墳群稲荷山地区分布調査

- 1 所在地 高松市宮脇町二丁目・室新町
- 2 調査期間 平成24年1月27日～2月10日
- 3 調査担当者 高上 拓・松篠 紀子  
徳島文理大学文学部  
文化財学科 大久保 崇也 教授
- 4 調査の原因 重要遺跡確認調査
- 5 調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「稲荷山姫塚古墳」など多数の古墳を含む稲荷山全域である。古墳の現状を確認するために分布調査を実施した。

対象地には前方後円墳を含む積石塚9基と、盛土墳1基が確認されており、その中には稲荷山姫塚古墳など、残存状況の良好な古墳も含まれる。高松市ではこれらの古墳の価値を明らかにし、国指定史跡「石清尾山古墳群」への追加指定を目指した事業を開始している。今回の調査目的は、古墳の現状確認と追加指定対象古墳の選定である。

調査の方法としては既に知られている古墳の踏査と現地の詳細観察を行った。

記録方法として、古墳台帳を作成し、所見の記入を行った。第18図に掲載したものは台帳の一例である。調査の進展によって記載内容は順次更新される性格のものであるので、ここで示したのは平成23年度段階での解説である。

台帳作成にあたり、墳丘規模、表探遺物などの基礎的な情報のほか、以後の事業展開において、調査対象となる古墳を選定する際の基準資料とするために、遺構の残存状況と崩壊の危険度に特に着目して観察を行った。遺構の残存状況については、稲荷山2・3号墳は樹木の繁茂と積石の崩壊により、辛うじてその存在が確認できる程度である。一方で滅失したとされる稲荷山北端2～4号墳が所在する近辺で、塚状の石の集中を確認するなど、遺跡の分布については再考の余地があることを確認した。こうした状況の中、稲荷山姫塚古墳、稲荷山北端1号墳、稲荷山1号墳については残存状況が比較的良好であり、特に稲荷山姫塚古墳は前方部前端の段築が複数段明瞭に確認できた他、前方部側面の段築など、複数箇所で遺構の残存状況を確認した。

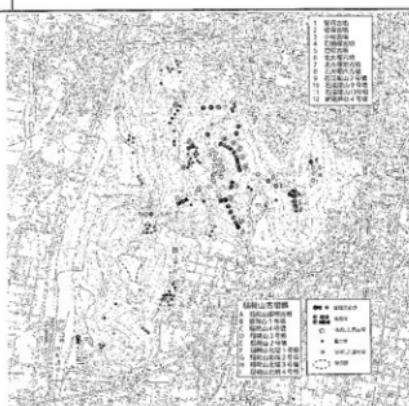
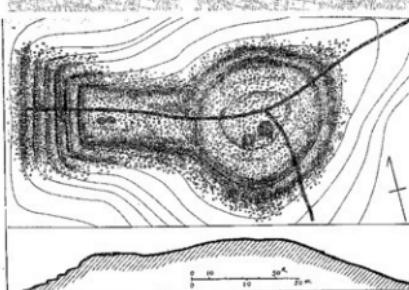
崩壊の危険度についてであるが、稲荷山5号墳を除き、尾根線上に展開する多くの古墳について、現在の登山道が墳丘上を縦断している。昨今稲荷山の登山道を利用するハイカー等は増加傾向にあり、尾根線上の積石が崩壊の危機に瀕している。いずれの古墳も同様であるが、特に稲荷山姫塚古墳は複数の登山道の集合地点であることから、危険度は高いものと考えられる。

## 6 まとめ

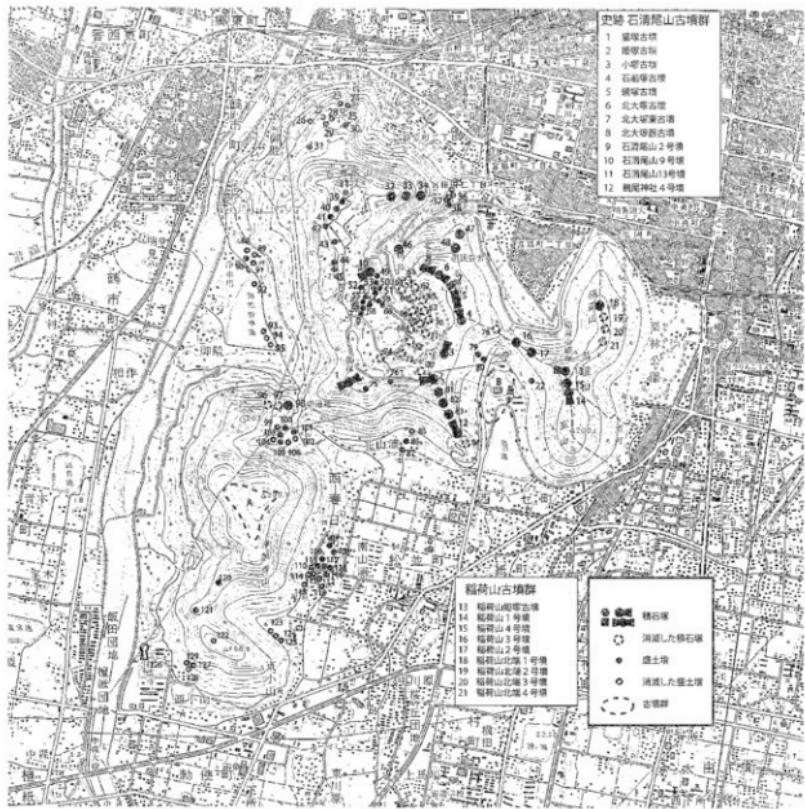
分布調査の結果、積石塚の大半についてその現状を確認することができ、また稲荷山姫塚古墳では本来の段築が残存している状況を確認した。前方後円墳という墳形、遺構の残存状況からも、史跡石清尾山古墳群に指定されている他の積石塚と遜色なく、一体的に捉え得る遺跡である。一方で、ハイカー等の増加に伴う崩壊の危険性は増していると考えられるため、将来的に古墳の保存について充分検討する必要があると考えられる。これらの調査結果から稲荷山地区の調査にあたっては、第一に稲荷山姫塚古墳に着手する方針を定めた。(高上)



第17図 調査位置図 (S=1/15,000)

福荷山姫塚古墳										
所在地	高松市室新町・宮窓町2丁目			残存状況	良					
立地	福荷山中央の山頂			墳形	前方後円墳					
国土座標				段築	前方部明瞭					
墳丘	全長(m)	後円部(m)		前方部(m)						
	49	直径	高さ	長さ	高さ	端部幅	測量対象面積(m <sup>2</sup> ) 1264			
		27	4	22	3.5	11.5				
墳端列石	有	砂岩円礫		有	表採遺物	土師器細片				
崩壊状況 と要因	全面に崩落し石材が散乱するが、數箇所で段築の痕跡。特に前方部前面の残存状況良好。 -古墳上に登山道。頻繁な登山者。			調査の優先順位	残存状況:A 崩壊の危険度:A					
石積み等 特記事項	前方部前面では高さ1m程度の石垣状の段築。石材を小口積みにする。 前方部南側面で段築の石列。墳丘内側に直線的に伸び、撥形の前方部の可能性。 後円部南斜面でも段築の可能性あり。									
位置図										
										

第18図 古墳台帳(例:福荷山姫塚古墳)



第19図 石清尾山古墳群古墳分布図

ふなおかやまこふん  
船岡山古墳（第8次・9次調査）

- 1 所在地 高松市香川町大野・浅野
- 2 調査期間 平成24年2月16日～3月23日（8次）  
平成23年8月20日～9月14日（9次）
- 3 調査担当者 高上 拓  
徳島文理大学文学部  
文化財学科 大久保 徹也 教授
- 4 調査の原因 重要遺跡確認調査
- 5 調査の概要 平成20年度より高松市教委と徳島文理大学文化財学科が実施している。船岡山古墳の第8次・第9次の確認調査である。高松市では、前方後円墳である1号墳の東側くびれ部（16トレンチ）の調査を実施した。なお、9次調査で一連の調査は完了した。
- 6 調査成果

**16トレンチ** 1号墳の東側くびれ部検出を目指し設定したトレンチである。第7次調査から掘削を開始し、第8次調査で拡張を行ったがくびれ部の検出に至らなかったため、第9次調査で再度拡張し、図示した範囲となった。

調査成果としては、大きく①1号墳の東側くびれ部を検出した。②後円部側で3段以上、前方部側で2段以上の段築を確認した。③段築の構築方法が明らかになった。④テラス面の構造が明らかになった。⑤積石と共に盛土を多量に用いた墳丘構築方法を確認した。⑥多量の円筒埴輪の出土状況を確認したことが挙げられる。以下ではそれぞれの概略について記す。

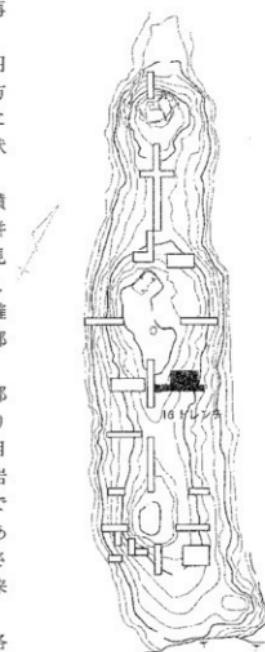
**①1号墳東側くびれ部の検出** トレンチ中央やや東よりの位置で、墳端のくびれ部を確認した。第6次調査で確認した西側くびれ部の位置と併せて考えると、1号墳のくびれ部の幅は約105mを測る。前方部形状を見ると、墳端の石列が外方に向かって開かず、やや内側に直線的に伸びた後、さらに内方へ緩やかに屈曲している。西側くびれ部では前方部の形状を確認できていないため、1箇所での復元になるが、くびれ部からやや前方部よりの部分に前方部最小幅が位置する可能性が考えられる。

**②3段以上の段築の確認** 上述の墳端よりも約0.8m内側で、後円部～くびれ部まで残存した段築を確認した。前方部側は後述する搅乱により改変され、確認できない。これを2段目の段築と呼称する。また、2段目の段築よりもさらに内側に0.8mの地点で、大振りな塊石の前面に安山岩板石が直線的に配されたように見える状況を確認した。残存状況は不良であるが、下段の段築の構造と類似するため、この位置を3段目の段築であると判断した。なお、これまでの調査により、後円部墳頂は大きく削平され高さを減じていると考えられる。3段目の段築の標高を考えると、本来はもう数段段築が築かれていた可能性が高いものと考えられる。

**③段築の構造** 1～3段目までの段築の構造を確認しておく。まず各段の構築方法を見ると、共通しているのは大振り（長径0.3～0.8m程度）の塊石を配置し墳形の大略を整えた後に、その前面に安山岩板石を垂直方向に積み上げている。安山岩板石は石材の長手方向を正面に向けて積み上げる。各段で異なるのは、塊石の背面構造である。1段目の段築は地山を高さ0.2m程度の段状に削りだした後、できた平坦面上に塊石を配置している。また、安山岩板石の一部はその基底部に若干の盛土による高さ調整がなされているが、



第20図 調査位置図



第21図 トレンチ配置図 S=1/800

大半は地山削りだし面の直上に積み重ねられている。一方で、2段目・3段目は地山面の上に地山起源の盛土で墳形の概略を成形した後、盛土上に塊石と安山岩板石を配置している。

統いて各段の高さであるが、1段目は最大で0.3m程度の安山岩板石積みが確認できている。この最上部の板石の標高が後述するテラス部の標高とはほぼ一致するため、本来の形状をほぼ保っているものと推測される。2段目では最大で0.6m程度の安山岩板石積みが確認でき、1段目よりも倍程度高いことが分かる。3段目については1石のみの残存で本来の高さは不明である。以上から、各段の高さは同一で無かった可能性が考えられる。また、1段目の後円部側では、地形に沿って下降する地山面に沿って緩やかに段築石材も傾斜している（土層図1）。のことから見ると、段築が地形に応じて構築されていることが分かり、水平方向の高さはあまり揃っていない印象を受ける。

後円部と前方部の施工順を確認するため、1段目と2段目の段築を観察した。まず塊石の配置状況をみると、前方部・後円部いずれかが先行して形成された痕跡は見られず、ほぼ同時に施工されたものと考えられる。また、安山岩板石は、くびれ部の結節点では後円部に連続する石材が墳丘の内側まで入りこんでいることから、後円部側が先に積み上げられ、その後前方部側が施工されたことが確認できる。これらのことから、墳形の大略成形についてはほぼ一体的に施工され、墳丘のいわば最終化粧工程において、部分的に後円部が前方部に先行したと判断できる。ただし、この先後関係はあくまでも部分的なものであり、後円部と前方部の構築順を示すことはできない。

④テラス面 1段目と2段目の段築の間、2段目と3段目の段築の間でテラス面を確認した。それぞれ下段、上段のテラスと呼称する。下段のテラス面では地山の直上に砂岩小円礫を充填して平坦面を形成した状況が確認できる。前方部側は搅乱で削平されているため確定はできないが、後円部側に密に小円礫が充填されており、前方部側ではあまり入念でない印象を受ける。トレンチ北東隅では、テラス面の上部が部分的に強く赤褐色を呈する状況が確認できた。赤色顔料が散布されていた可能性も考えられる。

上段のテラス面は、残存状況があまり良好ではなかったが、下段とはほぼ同様に砂岩小円礫を敷きつめていたと考えられる。下段の段築ではあまり見られなかったが、地山起源の小礫も比較的多く認められた。

テラス面の構築順序であるが、2段目の段築における安山岩板石は地山の直上に積み上げられており、基底石の下部に砂岩円礫が敷かれていないことから、テラス面の円礫敷きは段築の形成よりも後の工程だと考えられる。

⑤墳丘構築方法 ここまで段築の構築方法を確認してきたが、墳丘の中側、いわゆる「芯」の部分の構築方法を確認するため、トレンチの西南端で幅約0.3mの断割り調査を実施した（土層図2）。また、トレンチ中央の大規模な搅乱を利用し、2段目段築から上段のテラス面にかけての断面を合わせて観察した（断面C-C'）。まず、土層図2の西端を見ると、地山の上に地山起源の盛土が最大厚で約0.6m確認できた。盛土は複数回、互層状に重ねられており、非常にしまりが強く強固である。のことから、前方部墳頂付近は厚く盛土がなされ、その上面に地山起源の礫が不規則に積まれたものと考えられる。

一方、断面C-C'を見ると、段築の構造で一部述べたが、2段目の段築の構築に先行して盛土が成されており、盛土上に石材を配していることが分かる。さらに上段のテラス面も盛土上に小円礫を充填して形成されている。下段のテラス面よりも下ではあまり盛土が認められず、地山の削りだしによって古墳の成形がなされたと考えられる一方で、2段目の段築よりも上部（内部）の形成にあたっては、盛土の多用により墳形の概略が整えられていたと判断できるだろう。

⑥埴輪の出土状況 西側くびれ部（9トレンチ）と並んで大量の埴輪片が出土した。出土状況であるが、本来の配置位置を示す痕跡は確認出来なかった。しかし、1段目の段築よりも外側では、多量の埴輪が折り重なるように検出した。破片もあまり細片化しておらず、接合作業により大部分が復元できるものと考えられる。現在整理作業中であり詳細は本報告書において記載することとした。1段目の外側で地山直上に転倒した状況で出土した埴輪をみると、内側に礫を詰めたような状況もなく、墳丘上部から転落しているようである。残存状況が良好であることからみても、最下段の墳丘外周に立て並べられたというよりは、墳丘上に配置されていたものと考えられる。ただし、下段のテラス面にも埴輪が配置されたような痕跡は確認出来ておらず、本来の配置位置を特定するには至らなかった。これまでの調査成果から、くびれ部を埋没させた多量の土砂が後円部の削平に伴うものであると想定すると、大半の埴輪は後円部上に配置され

ていた可能性が高いと考えられる。

#### ア　まとめ

調査成果は多岐に渡るが、概略をまとめると、まず前方部形状が明らかになった点は大きな成果である。これまでの調査成果で前方部前端が墳形に聞くことを確認していたが、前方部最小幅がくびれ部よりもやや前方部側に寄った地点に位置する可能性が高いことは、墳形の点で古相を呈する特徴であるとされる。これまでに埴輪の様相や墳形から古墳時代前期前半に位置すると考えてきたが、それを追認する特徴を確認した点で重要である。

また段築の構築方法が明らかになった点も重要である。大振りな塊石の前面に安山岩板石を垂直方向に積み重ねる手法は西側くびれ部でも確認できており、東西の両くびれ部の構築方法がほぼ共通することが明らかとなった。一方で後円部北端では塊石のみで板石積みが認められない点、前方部前端では塊石の上に安山岩板石を積み重ねた可能性が考えられる点、前方部西側面では地山削出しの平坦面上に直接安山岩板石を積み上げる点など、部位によって構築方法が様々であることが明らかになった。テラス面の構造についても、西側くびれ部では小円礫が確認できないが、東側くびれ部では特に後円部側で小円礫が密に充填されるなど、部位による構築方法の多様性は特筆すべき特徴である。

当古墳で積み重ねてきた調査の成果は大きく、当該期の積石塚に類する古墳の調査事例として極めて重要な成果である。徳島文理大学が担当して調査を実施した部分でも後円部の規模、構築方法、古墳築造前の基礎地盤形成などについて重要な成果があがっている。共同で実施してきた全ての調査成果をまとめる正式な報告書は整理作業後に刊行する予定であり、整理作業を進めた上で成果を広く公開し、今後の調査研究に資するものとしたい。(高上)



第22図 16トレンチ全景（東から）



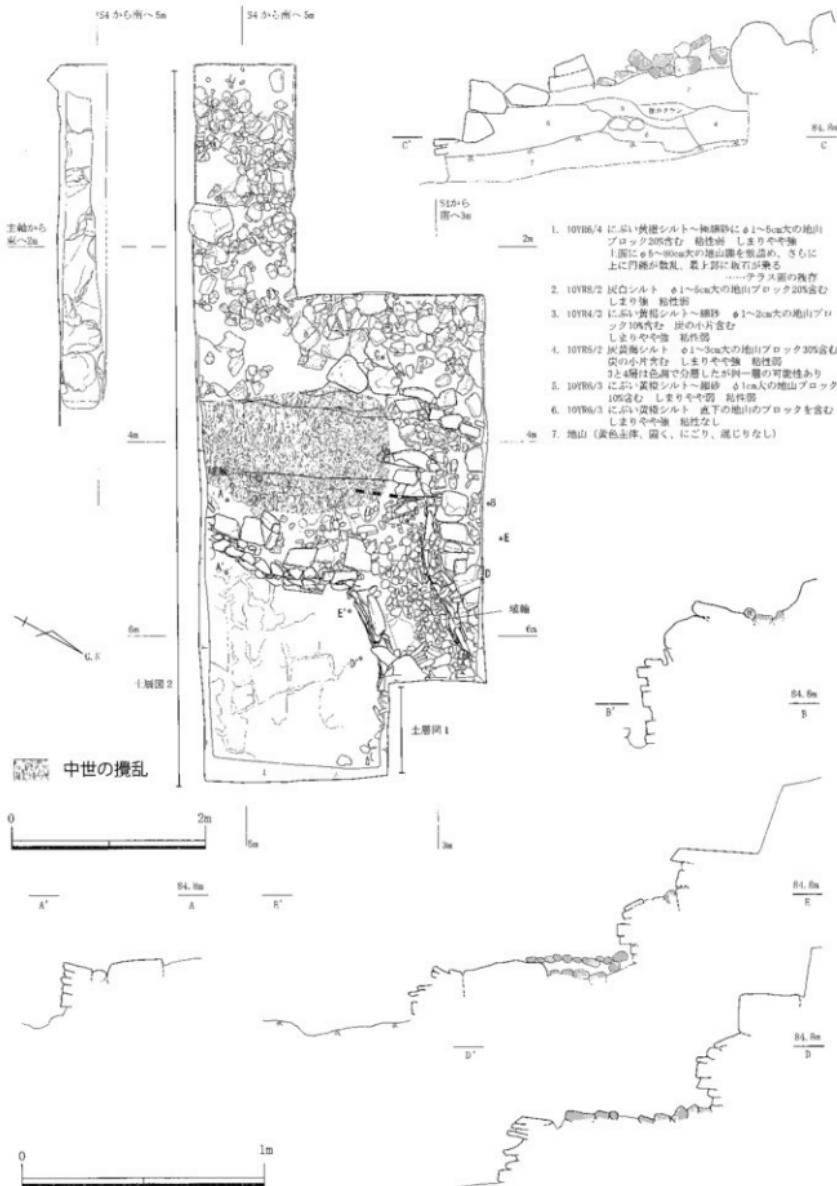
第23図 段築の側面（南東から）



第24図 1・2段目のくびれ部と下段のテラス（南から）

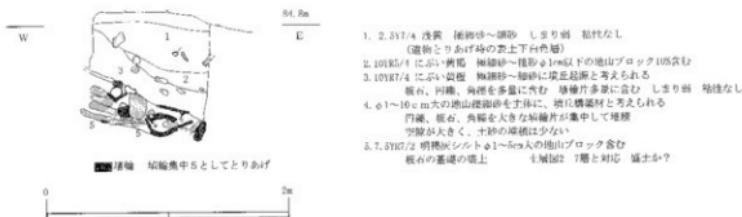


第25図 墓輪出土状況（東から）

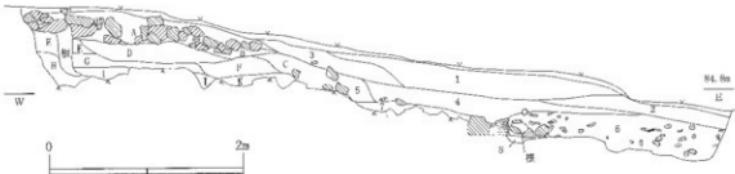


第 26 図 トレンチ平面図および断面図

土層図1



土層図2



第27図 トレーニング断面図

## たかまつじょうあと まる うち もく 高松城跡 (丸の内地区)

- 1 所在地 高松市丸の内
- 2 調査期間 平成24年2月13日
- 3 調査担当者 小川 賢・中西 克也
- 4 調査の原因 都市計画道路高松海岸線道路整備
- 5 調査の概要

調査地は史跡高松城跡に南面する都市計画道路整備地内で、高松市により用地確保が完了し工事が可能となった区間を対象として試掘調査を実施した。調査の結果、区間内は既存の構築物等の基礎により破壊が一部で認められるものの、高松城に関連した遺構面が比較的良好に残っており、遺構の広がりを確認することになった。

### 6まとめ

今回の調査および既往の調査歴から、既に周知の埋蔵文化財包蔵地として登載されている高松城跡(丸の内地区)の範囲に追加を行った。工事の着手時期については未定であるが、保護措置について事業課との調整の結果、当該事業者負担のもと本発掘調査による記録保存の措置を図ることとし、平成23年度から24年度にかけて調査を実施している。(小川)



第28図 調査位置図

## あじちょうりゅうおうさん もく 庵治町竜王山地区

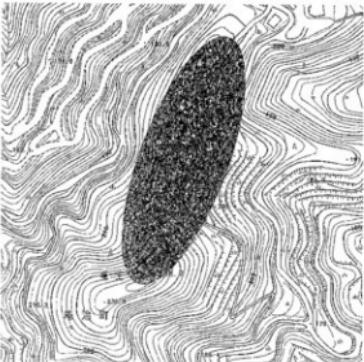
- 1 所在地 高松市庵治町
- 2 調査期間 平成24年5月22日～23日
- 3 調査担当者 高上 拓
- 4 調査の原因 公園造成工事
- 5 調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、事業面積が広大であったため、試掘調査を実施した。試掘にあたっては山頂の尾根線を中心に8箇所のトレンチを設定し、人力で掘削した。

試掘の結果、いずれのトレンチでも表土直下で岩盤が露出した。対象地は過去に大規模な農場として利用されており、その際に地形の変改が広範囲に及んだと考えられる。

### 6まとめ

対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地とは認められない。  
(高上)



第29図 調査位置図

## しろあと いせき 城跡遺跡

- 1 所在地 高松市仏生山町
- 2 調査期間 平成24年4月23日
- 3 調査担当者 高上 拓
- 4 調査の原因 共同住宅建設工事
- 5 調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「百相城跡」に近接する。事業者の任意協力を得て試掘調査を実施した。北側を1トレンチ、南側を2トレンチとする。

1トレンチでは、東半でピットの集中を、西半で規模の大きな溝跡と考えられる造構とそれを切り込む疊の堆積を確認した。東半のピット群は埋土の特徴から大きく2種に区分することができ、ピット間にも切り合い関係が確認できるため、造構の形成に2つの段階があったことがわかる。一部のピットは直線的に並ぶため、柵跡や掘立柱建物跡の一部である可能性が高い。埋没時期を特定できる遺物は出土しなかった。ただし、後述する2トレンチの溝と埋土が類似しており、また造構面の土質も似通っているため、これらのピットの多くは中世に属するものと考えられる。東半では、暗褐色シルトを埋土とする規模の大きな溝跡（SD1）を検出した。完掘はしていないものの、埋土中より土師器片・須恵器片が出土している。遺物は小片であり、時期の特定には至らない。この溝は、概ね北西—南東方向に伸長しており、検出状況で最大幅1.4m、深さ0.6mを測る。溝の東西両側は疊の堆積層により切りこまれている。この疊の堆積層のうち、トレンチ中央の切りこみは遺物を検出しておらず、形成時期が不明であるが、東側については近世の瓦片等を含むことから、近世以降の切り込みであると考えられる。

2トレンチでは、東西方向と南北方向に延びる溝跡を複数検出した。溝跡の埋土も複数に分類でき、造構の切りあいも確認できるため、造構形成に複数の段階があったことがわかる。トレンチ西側では石組の溝を1条（SD2）、東側では「井」字状に連結する石組の溝（SD3～5）と、それらとは埋土の異なる溝を2条（SD7・8）、ピットを1基確認した。SD3からは土師器足釜・須恵器甕等が出土しており、小片で出土数も多くはないが、14世紀前半の年代が推定できる。また、SD8からは古墳時代に遡る土師器甕とともに15世紀中葉～16世紀前半の足釜が出土している。

### 6まとめ

今回設定したトレンチの全域において埋蔵文化財の包蔵状況が確認できた。開発に際しては適切な保護措置が必要である。（高上）



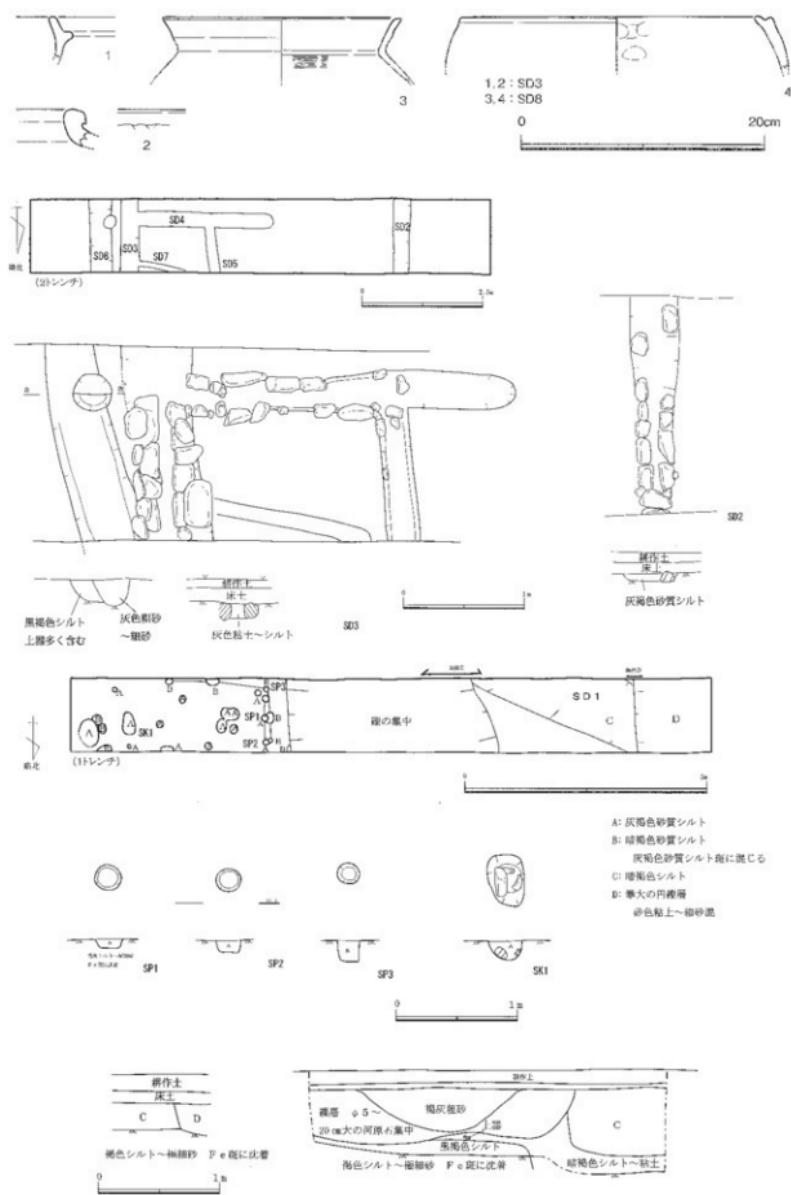
第30図 調査地位範囲



第31図 1トレンチ完掘状況（東から）



第32図 2トレンチ中央 溝群検出状況（南から）



第33図 出土遺物実測図および遺構検出状況平・断面図

## よこうちひがし い せき 横内東遺跡

- 1 所在地 高松市三谷町
- 2 調査期間 平成24年5月24日
- 3 調査担当者 高上 拓
- 4 調査の原因 土地造成工事
- 5 調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「横内東遺跡」に近接する。事業者から開発に先立ち試掘依頼を受けたため、試掘調査を実施した。調査にあたっては3箇所のトレンチを設定した。

対象地は試掘調査を実施する以前に既に造成工事が完了していたが、旧地表面が隣接する道路に対して低かったため、表土の除去のみで花崗土の土盛によって造成がなされていた。このため、1m以上の分厚い花崗土の下層で、旧耕作土以下の遺構面の残存状況は比較的良好であった。

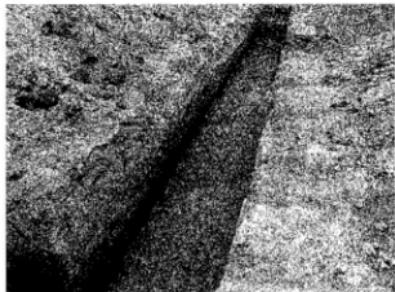
調査の結果、1トレンチの北半～中央と、2・3トレンチにかけて、複数の溝跡を確認した。そのうち、SD2・4は幅約0.2m程度ではほぼ平行して延伸しており、埋土も共通するなど、同時期に複数の溝を平行して配置していたことが考えられる。また、SD3は幅約0.6m程度で緩やかな円弧を描くような平面形を呈する。埋土がSD2・4とはやや異なっていることから、形成時期が異なる可能性も考えられる。いずれにせよ、溝の配置に一部規則性を認めうる可能性はあるが、遺構の配置から読みとれる土地利用の状況は、今回の調査成果のみでは判断できない。

遺構の所属時期であるが、いずれの遺構埋土中からも遺物を確認することができず、詳細は不明であるが、SD4の埋土直上から出土した捕鉢は、口縁部形状から15世紀中葉～16世紀前半の年代が想定できる。遺構の埋没はこれに先行するため、中世以前の遺構であると考えられる。この推測は、近接する横内東遺跡の発掘調査成果と齟齬をきたさない。

なお、1トレンチ北半の南端と、1トレンチ南半の北端では、旧三谷コミュニティセンターの基礎撤去に伴うと考えられる擾乱が遺構面よりも下位まで及んでおり、遺構・遺物の包蔵状況は確認できなかった。

### 6まとめ

旧コミュニティセンター基礎部分を除いた範囲で、新たに埋蔵文化財の包蔵状況が確認できた。近接する横内東遺跡と一連の遺跡であると考えられることから、横内東遺跡として登録した。このため、開発行為にあたっては事前の保護措置が必要である。(高上)



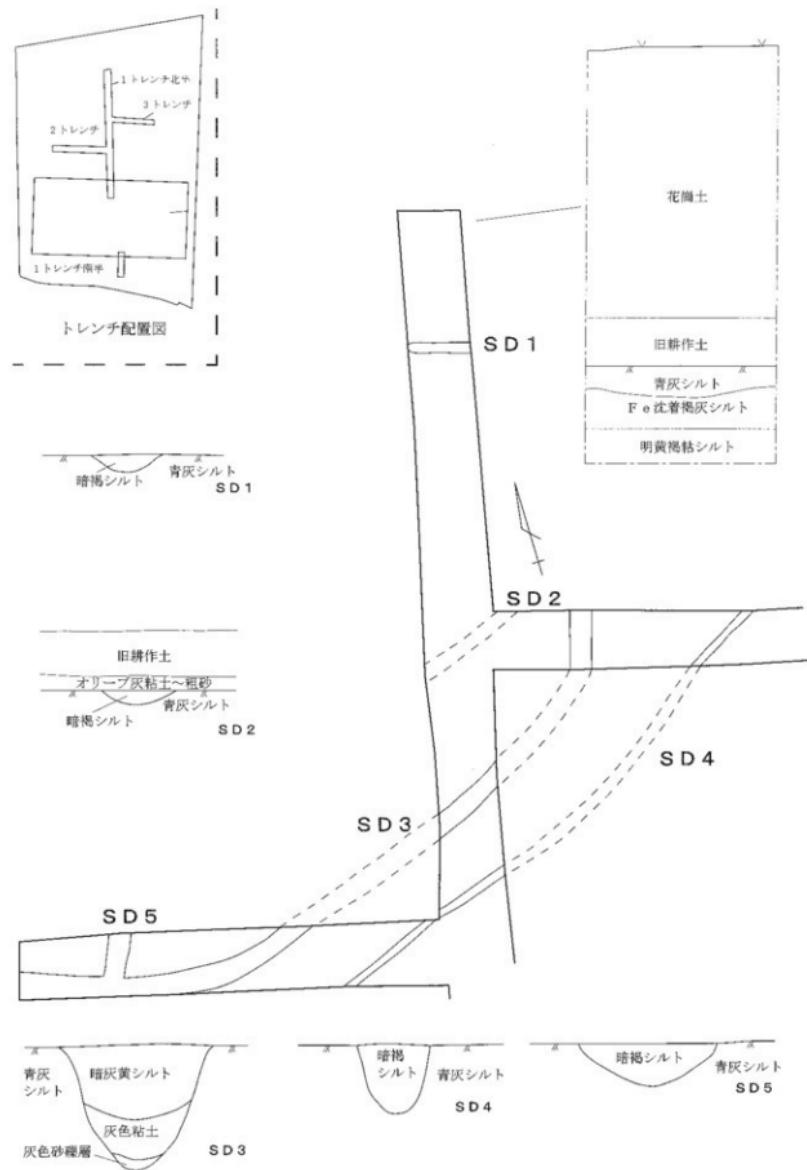
第35図 SD2～4検出状況（西から）



第34図 調査地位置図



第36図 SD4直上出土遺物



第37図 遺構検出状況平・断面図 ( $S=1/100$ ,  $S=1/20$ )

## 史跡讀岐国分尼寺跡 (12次調査)

- 1 所在地 高松市国分寺町居居
- 2 調査期間 平成24年6月5日～7月23日
- 3 調査担当者 渡邊 誠
- 4 調査の原因 内容確認調査
- 5 調査の概要

### (1)はじめに

今回の調査対象地は平成23年度に確認された尼房跡（以下、11次調査）と考えられる礎石建物跡の規模の確定を目的として実施した。対象地は市有地である。調査後は養生のうえ、埋め戻している。

### (2)調査成果

#### ア 基本層序

調査地の基本層序は上から耕作土（第44図調査区土層図の第1層）、床土（第2層）、褐灰色シルト質土（第3層）、褐灰色土（遺物を多量に含む：第4層）、ぶい黄橙色砂礫混じり土（地山／基壇土：第5層）である。ただし、第2トレンチでは南半分が後世に削平されており、南に向かってゆるく傾斜している。そのため、第4層が比較的厚く堆積しており、この層から掘り込まれた遺構が存在することが明らかとなった。

#### イ 遺構

遺構は第5層に掘り込む状況で、礎石および礎石抜き取り痕跡を確認したほか、多数の柱穴などを確認した。確認した遺構は第1トレンチが北限雨落ち溝、それに平行する礎石列および礎石抜き取り痕跡、西限雨落ち溝、第2トレンチが、礎石抜き取り痕跡、南限雨落ち溝である。第1トレンチで確認した礎石のうち一つはこれまでの安山岩ではなく、凝灰岩を方形に加工したものであった。

なお、柱間距離は東西方向が3.6m（約12尺）、南北方向は第2トレンチでの礎石抜き取り痕跡間の距離で4.5m（約15尺）であった。

また、第1トレンチで確認された北限の礎石間で礎石の位置にはならない場所で、方形に加工された凝灰岩を確認した。中央部に壇上積基壇に使用される葛石のような幅20cm程度の非常に浅い溝が掘り込まれており、基壇化粧に用いられた部材かもしくは梁材などを設置するための地覆石と考えられる。他の場所では同様な石材はなかったが、この地覆石の周辺でも同様に加工された石材片が出土した。また、同様な石材を据えていたと考えられる東西方向に延びる浅い溝状の掘り方も確認することができた。

11次調査で地山成形による基壇を想定したが、今回の第1トレンチは遺物が基壇に突き刺さった状況で、明確な地山が確認できた第2トレンチとは状況が異なっていた。この第1トレンチの状況から、地山の上に部分的に盛土を行っていた可能性が想定される。ただし、レベル差は5cm程度で、大量に盛土を行っているとは考えがたい。

この他に、包含層である第4層から掘り込まれた遺構を確認したが、遺構掘削の結果、中世以降の遺構であることが明らかとなった。

#### ウ 出土遺物

出土遺物は第45～49図で、雨落ち溝の検出面および基壇を覆う堆積層から瓦および土器が多量に出土し、前者からは創建期と考えられる十六葉細弁蓮華文軒丸瓦も出土した。後者としては10～11世紀代を中心とする土師器、須恵器のほかに綠釉陶器なども出土した。

### 6まとめ

以上のように、11次調査で確認された尼房跡の規模は、推定伽藍中軸線をもとに復元すれば、南北3間、



第38図 調査位置図

東西13間となり、周囲に幅2m前後の雨落ち溝をめぐらした礎石建物と考えられる。各柱間間隔は、東西方向が3.6m均等（約12尺）で、南北方向は北から3.9m（約13尺）、4.5m（約15尺）、4.5m（約15尺）となることが判明した。

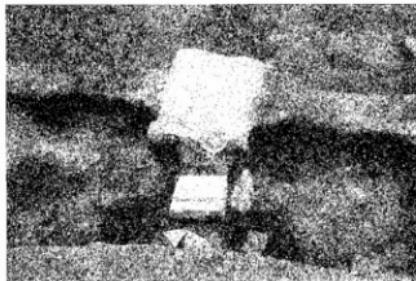
これまでの2回に及ぶ調査では尼房跡に伴う遺構の掘削は行っていないことから、雨落ち溝、基壇の構造、基壇に掘り込まれた遺構や建物自体の修築履歴などについては、整備を見据えた本発掘調査時に確認する必要がある。

これまで2回の調査結果から今後は、この尼房跡と金堂跡（現法華寺境内）との間に想定される講堂跡が存在するか否かを確認する必要がある。この金堂跡の北側一帯の調査を実施することで、讃岐国分尼寺跡の構造や歴史の解明に大きく繋がるものと考えられる。

また、古代の遺構面を覆う堆積層に掘り込まれた遺構は中世であることが判明したことから、中世段階には既に建物ではなく、基壇なども一定の削平を受けた後、埋没してしまっていたと考えられる。堆積土の状況を考慮すると、中世においては礎石もほとんど埋まっていた可能性が高い。（渡邊）



第39図 調査区全景



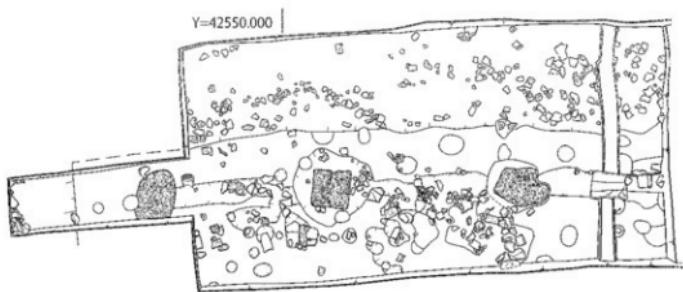
第40図 加工された凝灰岩



第41図 史跡範囲と調査位置図  
(丸数字は既往調査位置 S=1/3,000)



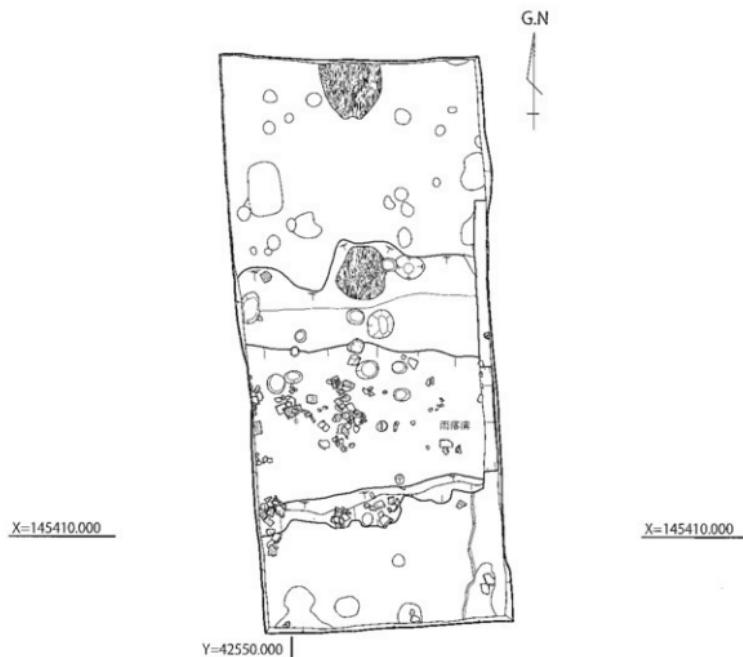
第42図 トレンチ位置図 (S=1/1,000)



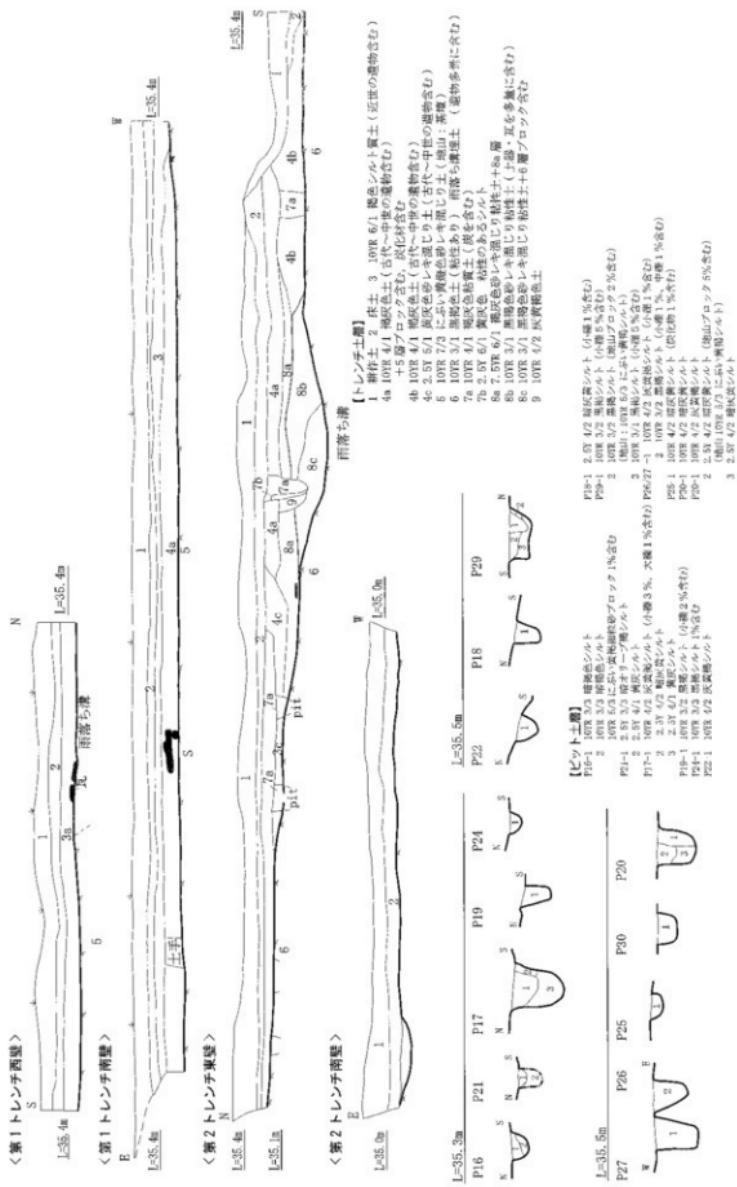
Y=42550.000

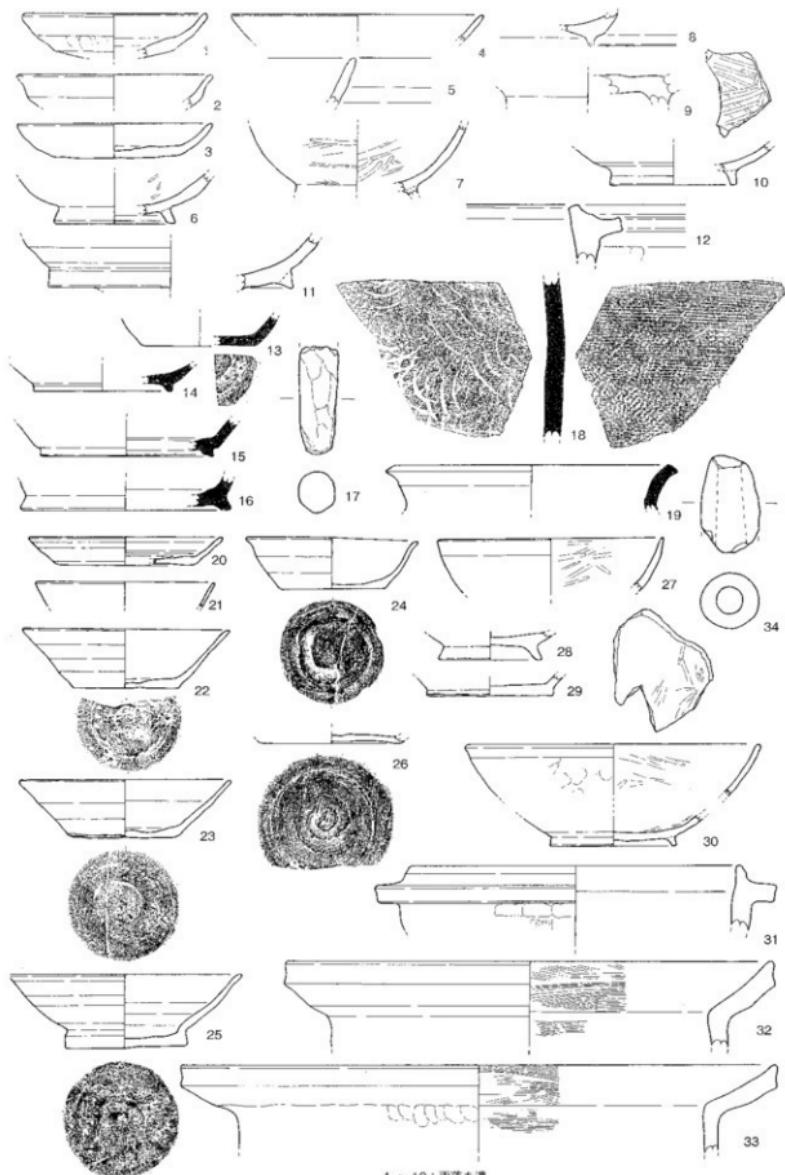
X=145420.000

X=145420.000



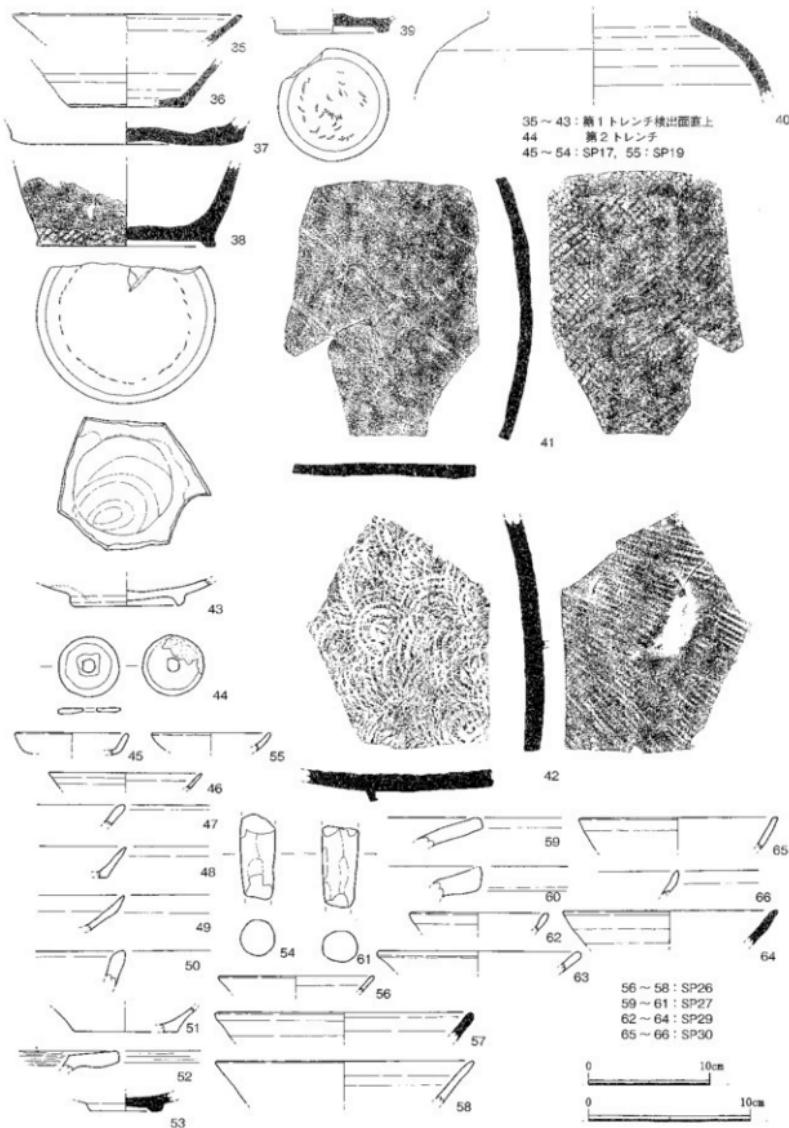
第43図 遺構配置図 (S=1/80)



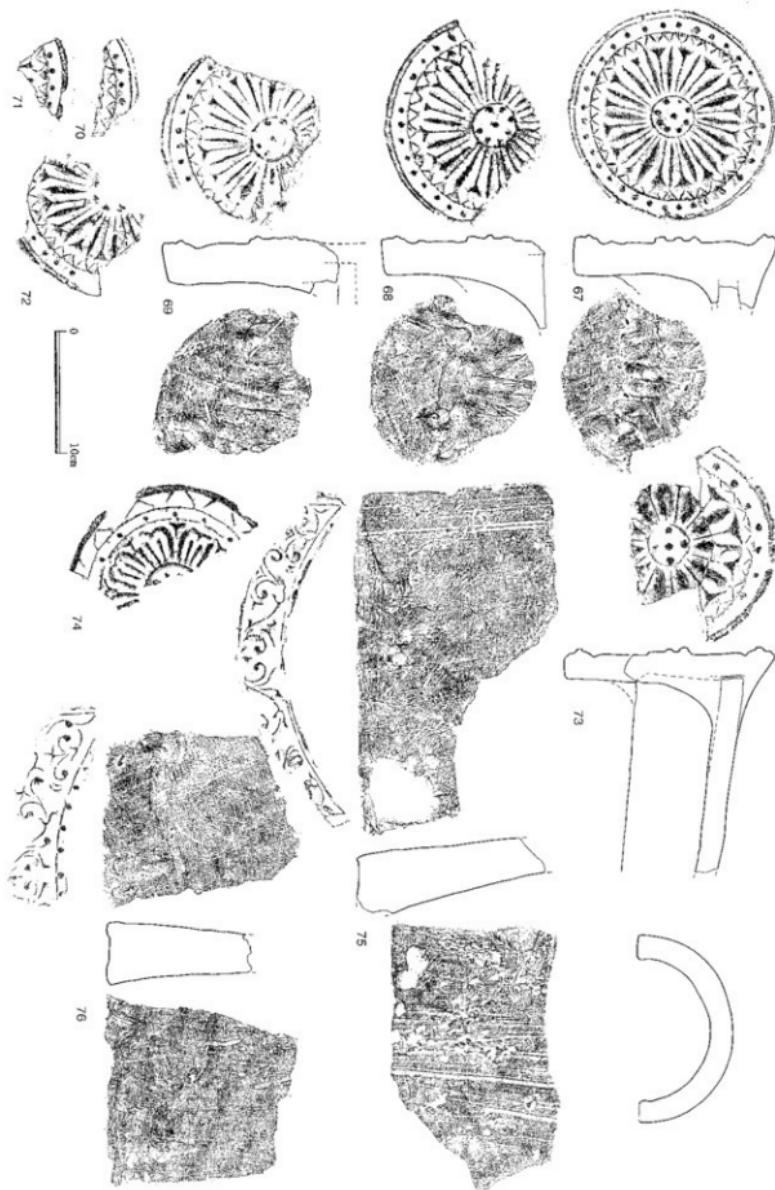


1 ~ 19 : 雨落ち溝  
20 ~ 34 : 梁出面直上

第45図 出土遺物実測図 (1) (S=1/4)

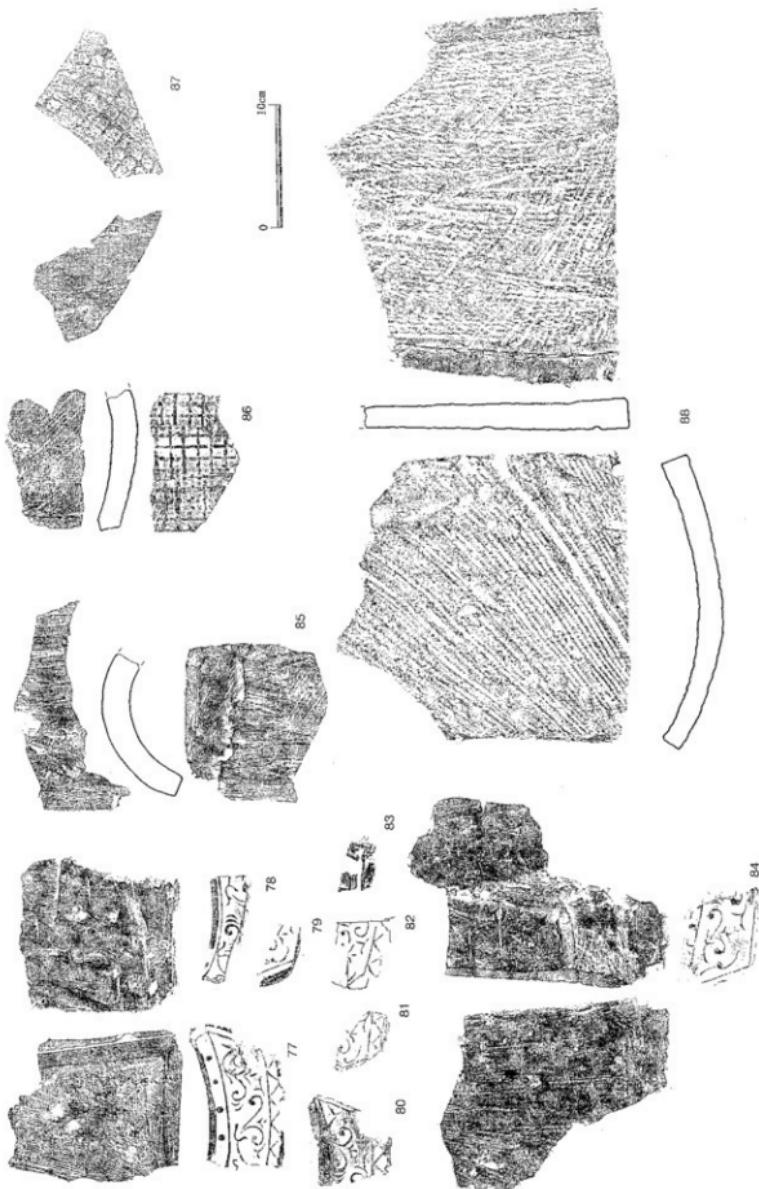


第46図 出土遺物実測図(2) (S=1/3, 1/4)

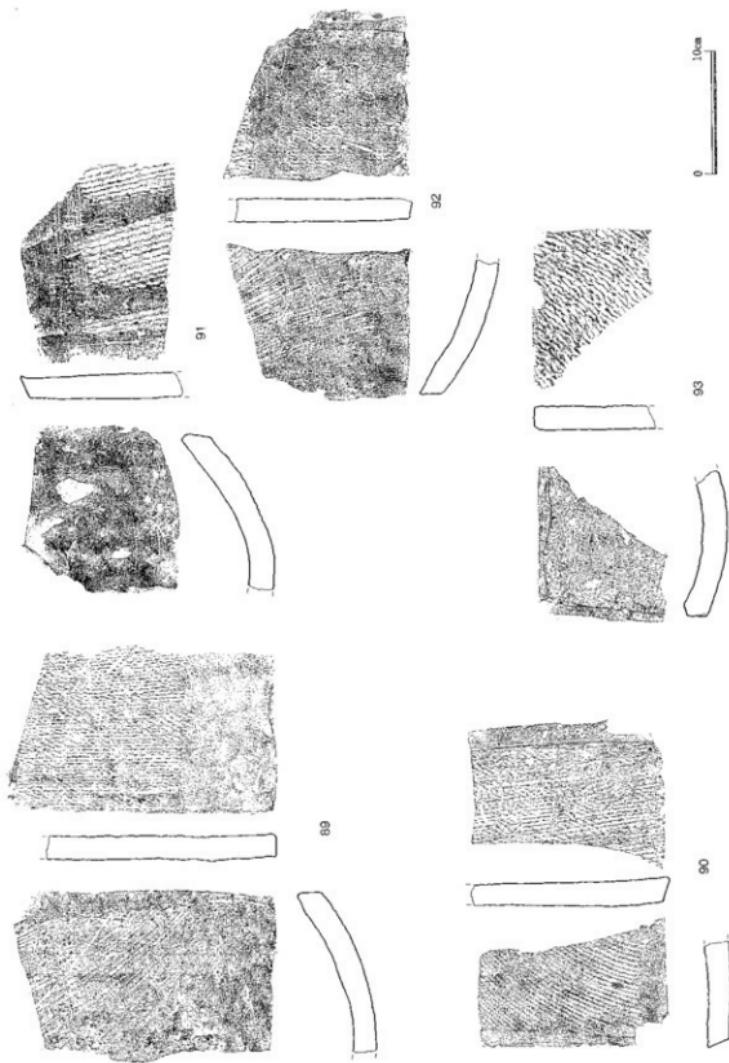


第47圖 出土遺物實測圖 (3) ( $S=1/4$ )

第48圖 出土遺物測量圖 (4) ( $S=1/4$ )



第49圖 出土遺物實測圖(5) (S=1/4)



## とおだにいせき 通り谷遺跡

- 1 所在地 高松市三谷町
- 2 調査期間 平成24年5月29日～30日
- 3 調査担当者 高上 拓
- 4 調査の原因 墓園区画造成工事
- 5 調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「通り谷遺跡」内に位置する。平成23年度に一部確認調査を実施したが、今回は墓苑のA・B・Dゾーンで確認調査を実施した。

Aゾーンでは尾根線上にトレンチを設定したが、遺構・遺物ともに確認できなかった。B・Cゾーンでは大規模な地形変更が及んでおり、旧地形が残存していないことが確認できた。

### 6まとめ

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地であるが、今回の調査範囲では埋蔵文化財の包蔵状況は認められなかった。

(高上)



第50図 調査位置図

## じょうりあと こうなんちょうよこい 条里跡（香南町横井）

- 1 所在地 高松市香南町横井
- 2 調査期間 平成24年7月19日
- 3 調査担当者 高上 拓
- 4 調査の原因 住宅造成工事
- 5 調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「条里跡」内に位置する。事業者から開発に先行して確認調査の依頼があり、確認調査を実施した。1トレンチでは、トレンチ西端で暗褐色シルトが埋土となる土坑を1基確認した。検出面は現地表面（耕作面）から約0.8m下である。長径0.7m以上を測る隅丸方形もしくは楕円形で、西端はトレンチ外へ伸びる。遺物などは出土しておらず、所属時期は不明である。

### 6まとめ

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「条里跡」内に含まれるため、今後の開発に際しては開発の範囲・規模に応じて適切な保護措置を図る必要がある。(高上)



第51図 調査位置図

## かわなべちょううまどう ちく 川部町鳥堂地区

- 1 所在地 高松市川部町
- 2 調査期間 平成24年8月27日
- 3 調査担当者 渡邊 誠
- 4 調査の原因 川岡放課後児童クラブ新築工事
- 5 調査の概要

調査地は旧河道の縁辺部に位置し、近隣の川岡遺跡では遺構および遺物が確認されていたが、調査の結果、土器を多量に含む整地土、石組水路を確認したものの、いずれも江戸時代から近現代のものであった。地山面で湧水があり、遺構は確認できなかったことから居住地としては適切でなかったと考えられる。出土遺物から近代以降に土地利用がなされたものと考えられる。

### 6まとめ

以上の成果から、埋蔵文化財包蔵地に該当しないと判断した。(渡邊)



第52図 調査地位置図

## はやしなたか い せき 林宗高遺跡

- 1 所在地 高松市林町
- 2 調査期間 平成24年8月28日
- 3 調査担当者 渡邊 誠
- 4 調査の原因 林小学校校舎増築工事
- 5 調査の概要

対象地の中央やや南よりにトレーナーを設定し、調査を実施した。調査では水道管、電気線などの埋設物によって一部調査ができなかった。

トレーナー東隅以外では、砂礫が地山を構成し、これらを掘削すると湧水し、遺構面は認められなかった。ただし、第1トレーナー東隅で砂礫からシルト質の安定した地山面を確認することができたため、北側にもう一つのトレーナーを設定し、その広がりについて確認を行った。その結果、同様な地山面が展開し、遺構を確認することができた。遺物は出土しなかったが、これまでの小学校敷地内の発掘調査から判断すると弥生時代の可能性が高い。

### 6まとめ

平成21年度の対象地西側の調査では、東側に搅乱が存在しており、その東限があきらかではないため、確認した遺構面が西側のどこまで残っているかは明確ではないが、拡張トレーナーの西壁面の土層観察から遺構面が西側に確実に展開しており、一定程度残っているものと判断できる。以上の結果から、平成25年度に発掘調査を実施する予定である。(渡邊)



第53図 調査地位置図

## かみのちょうにちょうのちく 上之町二丁目地区

- 1 所在地 高松市上之町二丁目
- 2 調査期間 平成24年10月3日
- 3 調査担当者 高上 拓
- 4 調査の原因 市営住宅建替工事
- 5 調査の概要

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、対象面積が広大であることから事業者の協力を得て試掘調査を実施した。

B団地では、南棟の南側を東西方向に調査した。既設の管が縦横に多数配置されており、改変が著しい。部分的に確認できた旧地形の堆積においても遺構・遺物ともに確認することはできなかった。C団地では、北棟の南側を東西方向に調査した。現地表面下0.7~0.9mの深度で粘土層を確認したが、遺構・遺物ともに確認できなかった。

### 6まとめ

対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地とは認められないと判断した。(高上)

## たひかみまちみやじりちく 多肥上町宮尻地区

- 1 所在地 高松市多肥上町
- 2 調査期間 平成24年11月1日
- 3 調査担当者 波多野 篤
- 4 調査の原因 薬局建設工事
- 5 調査の概要

多肥上町で計画された薬局建設予定地は、多肥松林遺跡の隣接地にあたるため、事業者の任意の協力により試掘調査を実施した。試掘調査は、事業予定地内に合計2本のトレーナーを設定して調査したが、いずれのトレーナーにおいても河川堆積を起源とする自然堆積層(地山)の上面で遺構・遺物は認められなかった。

### 6まとめ

今回の事業予定地では遺構・遺物ともに認められず、埋蔵文化財包蔵地とは異なると考えられる。よって、事前の保護措置は不要と判断した。(波多野)



第54図 調査位置図



第55図 調査位置図

## たかまつじょうあと にし まるちょうちく 高松城跡（西の丸町地区）

- 1 所在地 高松市浜ノ町
- 2 調査期間 平成24年10月16日～19日
- 3 調査担当者 高上 拓
- 4 調査の原因 交通広場整備工事
- 5 調査の概要

対象地は一部が周知の埋蔵文化財包蔵地「高松城跡」の範囲に含まれる。対象地内で上記の開発が計画されたため、先行して埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査に当たっては対象地内での開発計画を考慮して、4箇所のトレンチを設定した。

西トレンチでは、北東端の断ち割り部において2面の遺構面を確認した（第57図断面①）。上面の遺構面は褐色砂層を主体とした造成土であり、下面の遺構面は砂堆の褐色砂層である。

北東トレンチではトレンチ西端で2面の遺構面を確認した（第57図断面②）。また、トレンチ中央で既に撤去されている建物の基礎による搅乱を平面的に確認した。断ち割りの結果、建物基礎部分については、現地表面から2m以上にわたって搅乱が及んでおり、遺構面は残存していないことが判明した。

北トレンチでは、調査対象地の大部分が建物基礎を撤去する際に深く削平されていた。トレンチ中央で行った断ち割り調査では、現地表面から2m以上の深度まで搅乱が及んでおり、遺構面は現存していないものと考えられる。北東トレンチの所見からも、建物基礎の撤去の際、面的に搅乱を受けたものと考えられる。一方、トレンチの東西両端では僅ながら搅乱を免れた範囲があり、その範囲では遺構面・遺構が残存していた（第57図断面④⑤）。SD3からは備前焼の灯明皿などが出土した。確認できた遺構面の数は西端では1面、東端では1面以上である。

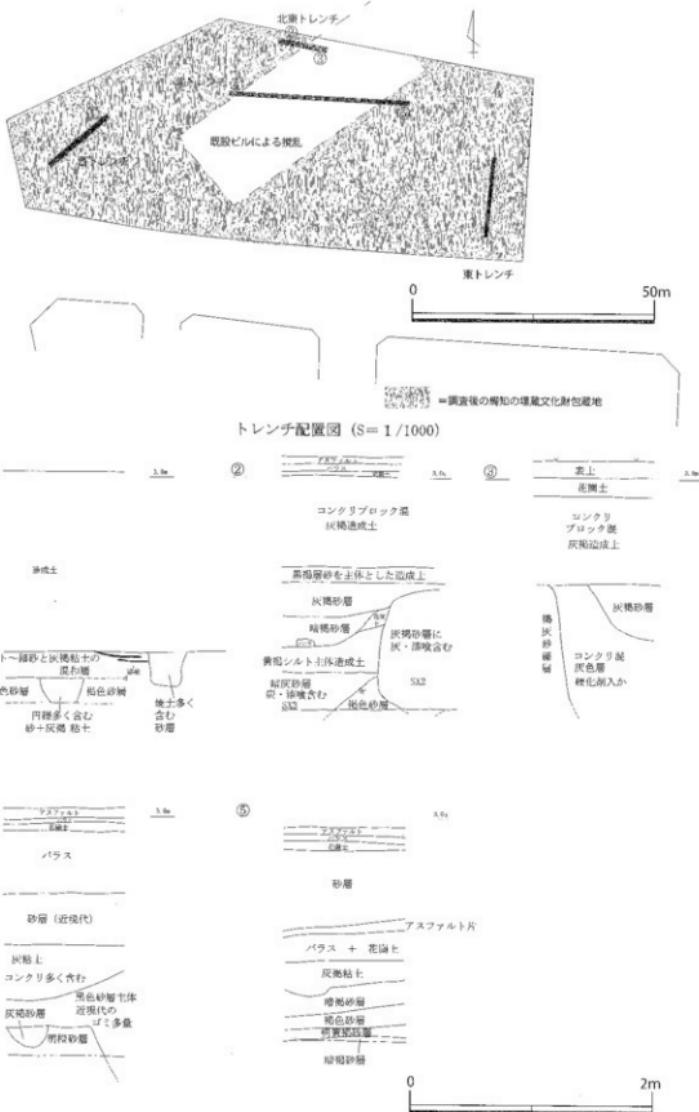
東トレンチでは、調査区に直行する石組溝（SD1）と石圓状遺構（SX1）を確認した。SD1は溝の両側壁、底板ともに石材（凝灰岩か）の加工石を用いて構築している。底板は中央がやや屈曲して窪む。遺構埋土中より瀬戸美濃系磁器丸碗、肥前系磁器碗などガラス片とともに出土しており、埋没は19世紀第2四半期以降と考えられる。SX1は花崗岩を主体とした石組で、確認できた深度まででも2石以上を石垣状に積み上げて壁面を形成している。調査区外へ続くが「コ」ないし「口」字形の平面形状が想定できる。南辺に沿って、内側に向かって階段状に設置された石材も確認しており、石圓いの内側に降りていくような利用形態が推定できる。水場の可能性を指摘できる。肥前系磁器瓶、明黄色釉の急須、圓化していないが瀬戸美濃系磁器端反碗が出土しており、こちらも埋没時期は19世紀第2四半期以降であると考えられる。

### 6 まとめ

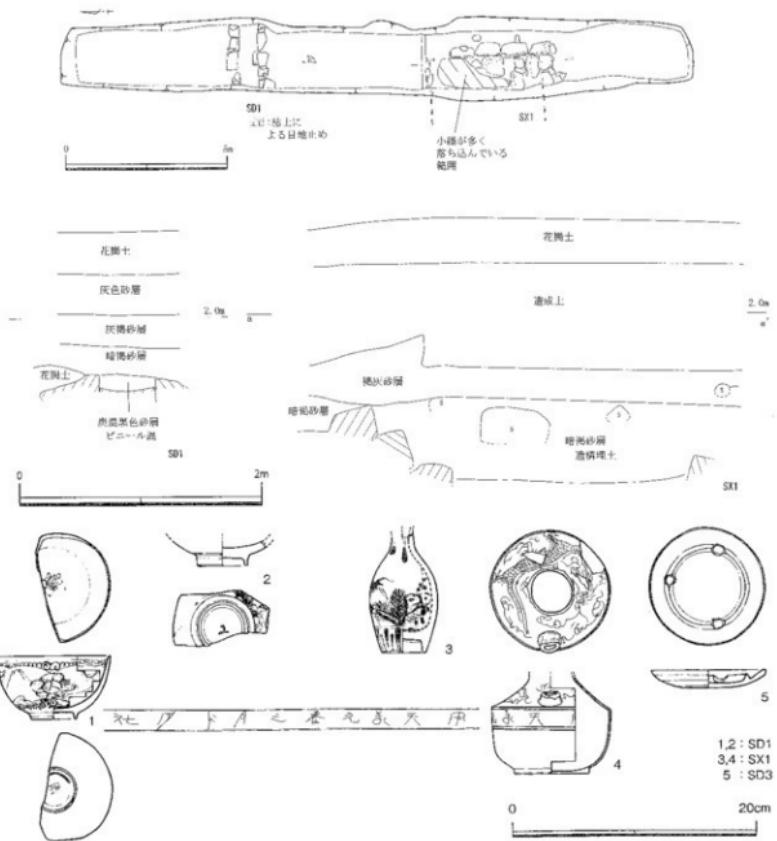
埋蔵文化財の包蔵状況としては、既存のビルによる搅乱を除いた範囲が埋蔵文化財包蔵地として認められる。城域としては西浜舟入と中堀の間に位置する、西外曲輪の北辺付近にあたり、屋敷地としての変遷が推測されている。石組溝などは周辺の既往の調査でも多く確認されており、屋敷地を区画する遺構であると考えられている。今回東トレンチで検出した遺構について、いずれも幕末以降に埋没した状況で、その形成時期を確定することはできなかったが、こうした屋敷地の変遷に伴う遺構である可能性は高いと考えられる。（高上）



第56図 調査位置図



第 57 図 トレンチ配置図およびトレンチ土層図



第58図 東トレーンチ SD1, SX1 平面・土層図および出土遺物実測図



第59図 東トレーンチ完掘状況（北から）



第60図 SX 1検出状況（北東から）

## くうこうあとら いせき かみあおきちく 空港跡地遺跡（上青木地区）

- 1 所在地 高松市六条町
- 2 調査期間 平成24年11月6日～7日
- 3 調査担当者 波多野 篤
- 4 調査の原因 事務所建設工事
- 5 調査の概要

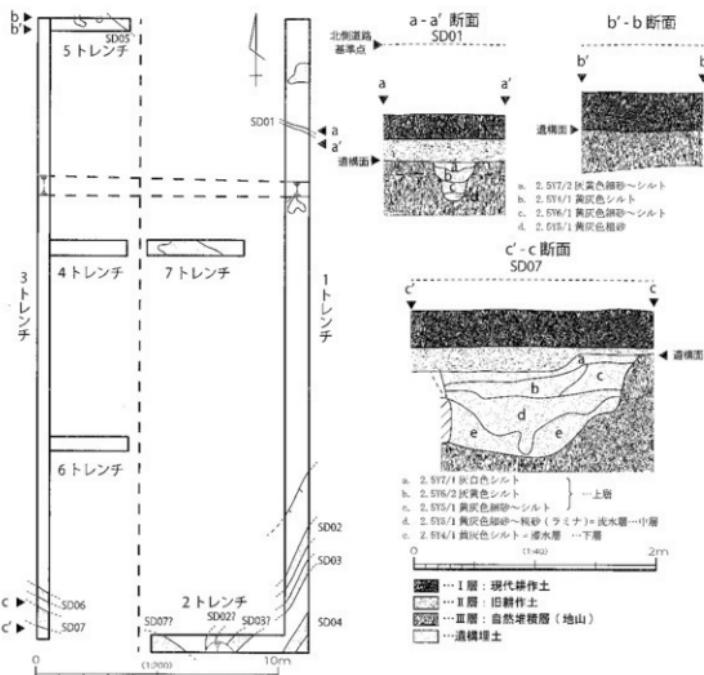
当工事箇所は、空港跡地遺跡に隣接するため試掘調査を実施した。調査では弥生～古墳時代の可能性がある土坑や溝、近世以降の溝を検出し、前者は事業地の西側北端と東側全域、後者は事業地の南端に限られる。以上から、弥生～古墳時代と考えられる遺構・遺物が出土した範囲を新規の埋蔵文化財包蔵地と判断した。

### 6まとめ

調査によって新規の埋蔵文化財包蔵地が認められたため、工事が実施される場合は適切な保護措置が必要であり、事業者と協議中である。（波多野）



第61図 調査位置図



第62図 調査区平・断面図 (1/200・1/40)

## じょうりあと こうなんちょう ゆ さ 条里跡 (香南町由佐)

- 1 所在地 高松市香南町由佐
- 2 調査期間 平成24年12月5日
- 3 調査担当者 波多野 篤
- 4 調査の原因 事務所建設工事
- 5 調査の概要

香南町由佐で計画された事務所建設予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「条里跡」の範囲内であるため、事業者の任意の協力により試掘調査を実施することとなった。試掘調査は合計3本のトレンチを設定して調査したが、そのうち2本のトレンチで近世後半以降の溝や土坑などを検出した。これらの遺構からは、磁器片や瓦片などが出土した。

### 6 まとめ

今回の調査では、近世後半以降の遺構・遺物を確認したが、条里跡に関わる遺構は検出できなかった。ただし、事業地の面積が一定以上あるため、工事の際には文化財専門員が立ち会い確認する必要があると考えられる。(波多野)



第63図 調査地位置図

## 第2章 史跡天然記念物屋島基礎調査事業（平成23年度分）

### やしまのさあと 屋島城跡（浦生地区）

1 所在地 高松市屋島西町

（浦生地区）

2 調査期間 平成24年2月6日～

3月30日

3 調査担当者 渡邊 誠・小川 賢

4 調査の原因 内容確認調査

5 調査の概要

(1) 調査の目的と方法

今回の調査は、これまでの調査トレンチを城内側に延長する位置関係にトレンチを設定し、城壁背面の断面構造についての資料を蓄積するとともに、城内側における遺構の所在確認を行うことを目的とした。

調査はすべて人力により実施し、調査後は養生し、埋め戻した。

(2) 調査成果

平成21年度調査で城壁背面（城内側）の斜面を削平した状況が確認でき、出土遺物が削平面の上位に当たる斜面地に由来する可能性が想定できた。そのため、背面部分の斜面の形状を理解するためにトレンチを設定し掘削を行った。その結果、全体的に緩斜面を呈するものの、平坦面を造成するような行為は認められず、遺構も確認できなかった。また、地山面までに、大小様々な疊（安山岩）を含む堆積層が確認でき、層の厚みが80cmとなる箇所もあった。城壁内部と同様に、山頂部からの大量の土砂によって斜面部もある程度埋まっていることが明らかとなった。

地山面の直上では、僅かに炭化材を確認した。これは城門地区でも認められた状況で、伐採などに伴う野焼きを示す可能性を想定できるが、時期は不明である。

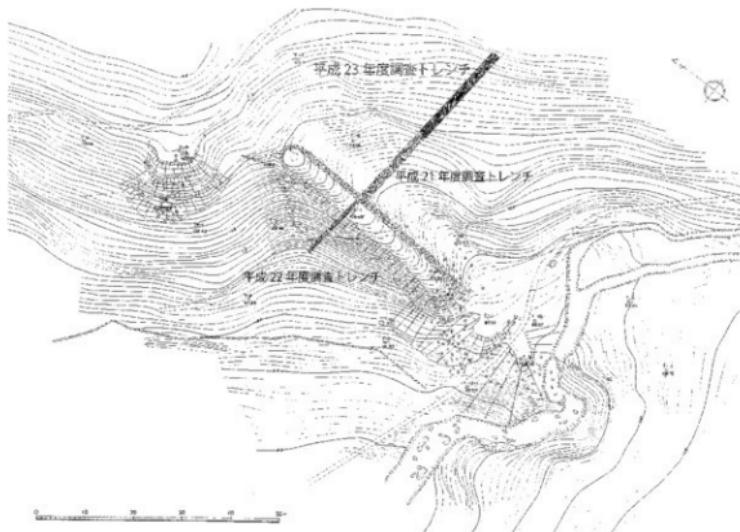
出土遺物は古代以降と考えられる土師質土器杯が1点出土したもの、平成21年度調査で確認されたようにまとまって遺物が出土する状況は認められなかった。

6まとめ

今回の調査では城壁背面の斜面部に、人工的な造成面などを確認することはできなかったが、土砂が比較的厚く堆積していることが判明した。城壁背面の構造については、面的な測量図の作成と、それによつて見出される平坦面の面的な確認調査が必要不可欠であり、今後の検討課題である。（渡邊）



第64図 調査地位置図 (S=1/50,000)



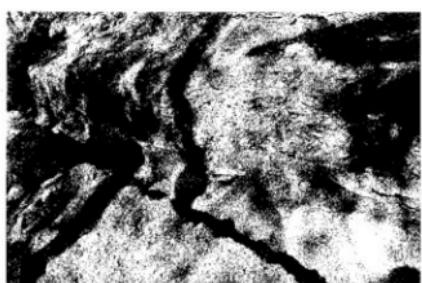
第 65 図 平成 23 年度調査トレンチ位置図 ( $S = 1/1,000$ )



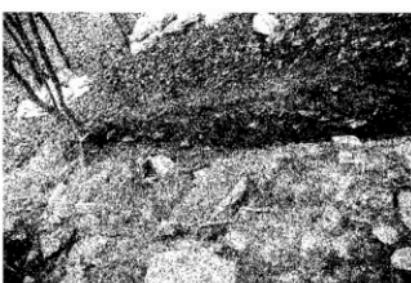
第 66 図 トレンチ上半検出状況



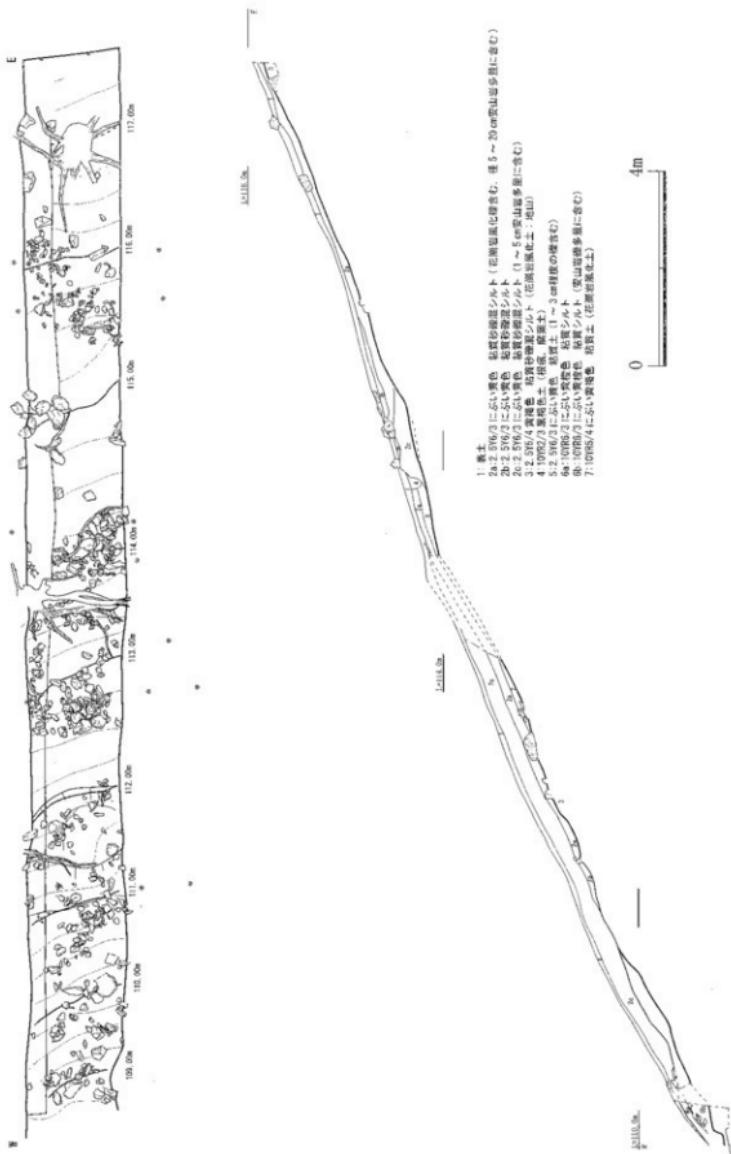
第 67 図 トレンチ下半検出状況



第 68 図 トレンチ上半土層



第 69 図 トレンチ下半土層



第70図 平成23年度調査トレーンチ平面図および断面図 (S=1/100)

報告書抄録

ふりがな	たかまつしない やせきはつくつよう さかめ ほう						
書名	高松市内遺跡発掘調査概報						
副書名	平成23年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書						
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第148集						
編著者名	小川 賢・渡邊 誠・高上 拓・波多野 駿・船篠 紀子・池見 渉						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 Tel. 087(839)2660						
発行年月日	平成25年3月29日						
所収調査	調査地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
押部廃寺(1)	上林町	37201	34° 17' 27"	134° 03' 51"	H23. 11. 30	18 m <sup>2</sup>	宅地造成
押部廃寺(2)	上林町	37201	34° 17' 24"	134° 03' 52"	H23. 12. 21 ~12. 27	319 m <sup>2</sup>	宅地造成
松林遺跡	多肥上町	37201	34° 17' 43"	134° 03' 16"	H24. 1. 6	40 m <sup>2</sup>	集合住宅建設
奥の池遺跡	西春日町	37201	34° 19' 24"	134° 01' 57"	H24. 1. 23 ~1. 24	36 m <sup>2</sup>	取水施設整備
特別史跡讃岐国分寺跡 第42次調査	国分寺町国分	37201	34° 18' 10"	133° 56' 35"	H24. 1. 26 ~1. 30	90 m <sup>2</sup>	宅地造成
石屋尾山古墳群縄傍山地区分布調査	吉脇町、宍道町	37201	34° 19' 52"	134° 02' 23"	H24. 1. 27 ~2. 10		重要遺跡確認調査
高松城跡(丸の内地内)	丸の内	37201	34° 20' 54"	134° 03' 04"	H24. 2. 13	74 m <sup>2</sup>	道路整備
船岡山古墳-第8次・9次調査-	香川町大野、浅野	37201	34° 16' 13"	134° 01' 58"	(8次) H24. 2. 16 ~3. 23 (9次) H24. 8. 20 ~9. 14	17 m <sup>2</sup>	重要遺跡確認調査
城塹遺跡	仏生山町	37201	34° 16' 51"	134° 02' 37"	H24. 4. 23	23 m <sup>2</sup>	共同住宅建設
庵治町竜王山地区	庵治町	37201	34° 22' 53"	134° 09' 09"	H24. 5. 22 ~5. 23	15 m <sup>2</sup>	公園造成
横内東遺跡	三谷町	37201	34° 16' 40"	134° 04' 09"	H24. 5. 24	30 m <sup>2</sup>	土地造成
通り谷遺跡	三谷町	37201	34° 15' 44"	134° 04' 42"	H24. 5. 29 ~6. 30	109 m <sup>2</sup>	嘉例地区造成
史跡讃岐国分尼寺跡-第12次調査-	国分寺町新居	37201	34° 18' 38"	133° 57' 46"	H24. 6. 5 ~7. 23	76 m <sup>2</sup>	内容確認調査
条里跡(香南町横井)	香南町横井	37201	34° 14' 58"	134° 00' 36"	H24. 7. 19	30 m <sup>2</sup>	宅地造成
川治町馬鹿地区	川治町	37201	34° 16' 02"	134° 00' 26"	H24. 8. 27	9 m <sup>2</sup>	放課後児童クラブ新築
林家窯跡	林町	37201	34° 18' 04"	134° 04' 12"	H24. 8. 28	40 m <sup>2</sup>	小学校校舎増築
上之町二丁目地区	上之町二丁目	37201	34° 19' 20"	134° 03' 56"	C1期地 B1地地 C1地地	40 m <sup>2</sup>	市営住宅建設
高松城跡(西の丸町地区)	浜ノ町	37201	34° 21' 00"	134° 02' 48"	H24. 10. 16 ~10. 19	60 m <sup>2</sup>	交通広場整備
多肥上町宮尻地区	多肥上町	37201	34° 17' 34"	134° 03' 28"	H24. 11. 1	22 m <sup>2</sup>	墓地建設
空港跡地遺跡(上青木地区)	六条町	37201	34° 17' 36"	134° 04' 39"	H24. 11. 6 ~11. 7	214 m <sup>2</sup>	事務所建設
条里跡(香南町山佐)	香南町山佐	37201	34° 14' 25"	134° 00' 45"	H24. 12. 5	62 m <sup>2</sup>	事務所建設
史跡天然記念物星島(星島町浦生地区)	星島町浦生地区	37201	34° 21' 42"	134° 06' 07"	H24. 2. 6 ~3. 30	44 m <sup>2</sup>	内容確認調査

所改遺跡名	種別	主な時代	土古遺物	主な遺物	特記事項
押山廃寺(2)	寺院、集落	弥生、古代	堅穴建物跡、圓柱建物跡、溝、ビット	弥生土器、土師器、須恵器	
松林遺跡	集落	弥生	溝、土坑	弥生土器	
奥の池遺跡	散布地	弥生	-	弥生土器	
特別史跡讃岐國分寺跡 第1次調査-	寺院	中世	溝、ビット	土師質土器、瓦	
石清尾山古墳群福岡山地区	古墳	古墳	積石塚	土師器	
高松城跡(丸の内地因)	集落、城郭	中世以降	溝、土坑、ビット	土師器、陶器、磁器	
船岡山古墳 第8次・9次調査-	古墳	古墳	東側くびれ部、段築、テラス面	円筒埴輪	
城壁遺跡	城郭	中世、近世	溝、石垣裏、ビット	土師器、須恵器、瓦	
御内東城跡	集落	中世	溝	土師器	
史跡讃岐國分寺跡 第12次調査-	寺院	古代、中世	雨落ち溝、礫石、礫石抜き取り窓、ビット	土師器、須恵器、織物陶器、瓦	
免印跡(香南町横井)	集落	-	土坑	-	
井宗町遺跡	集落	弥生	土坑、ビット	弥生土器、鐵器	
高松城跡(西の丸町地因)	城郭	近世	溝、石垣裏、石垣穴遺構	備前瓦、織物系陶器、門前系陶器	
空港施設跡(上青木地因)	集落	弥生～古墳、近世	溝、土坑	弥生土器、土師器	
条里跡(香南町由佐)	集落	近世	溝、土坑	磁器、瓦	
史跡天然記念物星島(南生地因)	城郭	古代	-	土師質土器	

### 高松市内遺跡発掘調査概報

－平成24年度国庫補助事業－

平成25年3月29日発行

編集・発行 高松市教育委員会

高松市番町一丁目8番15号

印刷 有限会社 中央ファーリング